99-232

萩園遺稿

三浦千春大人著

嵩山堂華房刊行

明治
30 1 10
内交

三浦千春大人肖像

明治二十六年十月三十一日新波正近方にて
はからすも三浦君にあひて

あなうれし今より後は君か名の　遊山

千春もいはるともにあそはむ

三浦千春君を追悼して　福羽美静

くりかへしおもひかへしてかたりつゝ
かへらぬ君を志のふけふかな

同　菊池武則

別れつるその神無月めくり來て
去くれぬ先にふるなみだかな

三浦翁を悼して　鵜飼息仙

ゆきまつる

恩波閣會風

萩園を訪ひて　　鵜久子

やしなひて見るらむ庭の植木まて

うらやまれぬる君か宿かな

かへし

花もなき庭のうふきの露にさへ

光をそへし君か百の葉

き使をはつかはされたりとて、おのれと相
譲りしい方まで、先たつことを十綱
手にうけまして、筒をめさるみもすあま
をそろそろと東京をさしてすみやかを定めう
れしさ使ちやきけるを、浦安質崎の紹
介そわ雲客和人のうちのはとんでかく
られしまよろ筒を歌よむことふ取きのこ
なる子ぬまへ学のつもおほろの今

いまろ社こそ着速しくすとまきと紀れ
ろまでろ社あるおほそうみとみろ
海あろい理待のをうそをそうみとみろ
筒を然ら次ぬまそろはこのこにあま
たろりて富ら号ひそ一世我おろ
札のこぬらをそろふまゆそしく
宴を我のこれろふ幸人とふ
ー高のこなら今ー世を捨の名

[illegible]富博士吳秀[illegible]我
婚[illegible]おゆ[illegible]する[illegible]多[illegible]良幹
[illegible]我嗣子に得[illegible]れ[illegible]い幸の[illegible]乃
幸と[illegible]れ[illegible]のう[illegible]わむ[illegible]つ[illegible]
翁な[illegible]れて一[illegible]
[illegible]れ歌文を[illegible]
をしるせ旦[illegible]
[illegible]のまま[illegible]
[illegible]

[illegible]と[illegible]我と[illegible]て矢部典列
老人は[illegible]
ひの[illegible]
[illegible]
我すゝ[illegible]
し言[illegible]
たりと[illegible]
て来[illegible]

を伺のことも移まて悟て我るほとり
一めるり此茶ハとくすき三めるりにほく近た
名はかるりよりぬ一のかるり少せめるる
もまるふことるるに過きたるこの世久言ま
るる物る又よるる伝のるを我おるりたまる
らるる井を今活ぬまくるを来てうれ
こはるまくひたするに悟りて死を悔めを
かなるすることる等ることるりまき翁ハ

進所の氣を富まれくい分れ老いるもか
るる千歌人るきくはその遠き位のたる
るる悟をおるれるを討へゆきて東久世言
時黒田福羽の君るるらにるることふ位迄我う汁
らるるるとれすり名を成りをはかておのもま
一ることるへとこのまいけまれ世よそるること
かくおるれるわこをひるをおのの眾るよ
るめ我あらはこととりてたくるるの

萩園翁小傳

萩園翁姓は三浦。名は千春。小字は春太郎。通稱を權左衛門といひ。萩園は其號にして。又椎園、萩廼舍、從容軒の別號あり。その先は相摸國に出て。南北朝の頃。三浦新介といへるあり。北畠氏に屬し。志摩國に住して。近郷を押領し。其後代々志摩七黨の首領なりしか。慶長中。九鬼氏と戰ひ。利あらずして滅ひ。子孫尾張に移り。知多郡の民籍に入り。千賀を氏とす。權左衛門良晴君に至り。名古屋に住し。德川家の祿を食む。正德中。式鑑君の時。姓を三浦に改む。萩園翁は藤次郎信道君の長子にして。母は山田重子。文政十一年正月十七日。名古屋前津町の家に生まる。幼にして學を好み。習字句讀を同藩の大島辰次郎に受け。壯なるに及びて博く和漢の書に涉獵し。同藩の碩學植松茂岳に就きて皇典を考究し。傍、國文國歌を攻め。造詣頗る邃し。二十二歲のとき父を失ひ。家を襲き。出でゝ藩に仕へしより。地方民政の職を閱歷し。美濃國武儀郡、上有知の陣屋に在ること數年なりしか。頗、治績あり。部內の重望を負ひて。今に至るも其地の人民は君か餘惠を謳れす。明治三年。藩廳の拔擢に因りて。笠松縣に出仕し。大屬に任し。租稅掛となり。尋きて岐阜縣大屬に轉じ。專地租改正の事に從ひ。後又同縣厚見、各務、方縣三郡の長

に任し。治功善く擧かり。頗聲望あり。明治十六年。病を以て職を辭し。爾來世務を避けて。優遊自樂み。吟詠獨娛む。翁始め籍を名古屋より武儀郡小瀬村に移し。居を此に定めて歸農の計をなし。後笠松、岐阜に轉せしか。明治二十二年。家督を挈けて東京に出て。寓すること三年。偶々濃尾の大震あり。末廣町の邸宅擧けて灰燼に委し。意愈居を東京に移すに決し。初め森川町に住ひ。後西片町に移り。當時の名流と風雅の交をなし。時に出て〻四方に漫遊し。心の欲する所に從ひて。其暮年を送れり。明治三十六年十一月二十九日。病むこと數日にして歿す。享年七十六。墓は北豊島郡染井共同墓地にあり。翁三男一女あり。男子菅彦、弘、饒三郎。皆先妻山田氏の出にして。翁に先だちて死す。一女みな子。後妻中村氏の出なり。爵學博士吳秀三に嫁す。翁嗣無きか故に。吳氏の女及び澁谷氏の子良幹を養ひて以て其後とす。

翁人となり眞率にして。恭謙を習とし。最信義を貴び。學者としては文に篤く、覽るに博く。強記にして、善く長く忘るゝことなし。其學は初め之を植松茂岳に受け。詠歌に巧に、國文を善くし。考證に長す。後又八田知紀に就きて教を受け。文書によりて疑を質し。道を明かにしたること幾多なるを知らす。

の交を締へる徒多かれとも概して歌事門の質疑に止まり未た子の如く道義の上にまで論及せし者を見しこと有らし云々とあるにても知らるゝなり其交はれる所。初めに同藩の學者野村秋足間島冬道あり。後に八田の門下たる村山松根あり。東京に出てゝよりは。都下の名流と交會し。知る人夥多ありしか。坂正臣、小出粲、伊東祐命、鈴木重嶺、佐々木弘綱、福羽美靜、黒田清綱、高崎正風、松波資之等諸家の如きは。往來最も親しかりしものゝ如し。著す所租調考、美濃奇觀、大矢田神蹟考、歌集、文集、隨筆、日記、紀行等其他若干卷あり。二十四年の震災によりて多くは皆燬燒して。存する所纔に十中の二三のみ。

翁は又私を却けて公を重んし。君上を敬すると共に祖先を崇ひ家鄉を思ふの情に切なりしかは。從つて又是等の事に關する講究治業にも亦心を致せり。嘗て相摸國三浦郡に蔟りて遠祖義明君の墓を展し。又志摩國國府村に赴きて家祖新介君の墓を治め。嘗て上有知の陣屋にありしときには。其地方珠に牧に萬延文久以來の飢饉にて窮餓の爲に死する者あるを傷み。惣管職某田宮如雲と謀り。太田驛の北方の原野を開墾して。之に貧民を移せしことあり。又文藝武術を教授するか爲に修其館を起し。自皇典を講義して後進者を奬勵したるも。今に人々の知る所なり。或は德川氏の末世に當りて。從來貯畜の資財中より金千兩を割き。之を藩に献し。以て祖先以來の舊恩に酬ふるの微意を表

したることあり。或は明治の初年。政府か士族授産の爲めに公債證書を發行し。官地を沽却せんとするや。危惧して躊躇する人もありしに。翁卒先して之に應し。名古屋支廳の舊趾（岐阜米屋町の裏にあり）を購ひ。荒蕪を開拓區劃して。末廣町と命名し。（米屋町は現町面の別名にして兼て三浦氏の徽章なり）衆人に稅貸せしかば。商賈之を便とし爭ひて此に移り。忽ち小市街をなし。今に至りて岐阜市中猶其便益に倚賴せさるなし。翁か如何に舊誼を忘れすして公義を重し。目前の少利に拘はらすして。却りて成敗利損の大體に明なるを知るへし。

之と同く翁は故事の今日に廢れたるを慨きて之を振興するの情に切なりし。大矢田の喪山か古事記に載する神蹟地なるに。後人の考證未た十分ならさるを慨して。（鈴の屋の古事紀傳、同門人市岡猛實の喪山考、同河村内鄕の追考あり）美濃奇觀なり）廢藩以來其の頓に衰頽に赴くを歎し。該地の宿老大野茂作等と謀り。資を投して。之を支持するの法を講し。遂に帝室御猟場に定められるへの基礎を作りたるか如き。以て其の一端を窺ふに足れり。

翁又吏務に長し。理財に敏く。其官に在るや。利を興し學を勸め。至る所治蹟少なからす。其身を處するや。清廉にして儉を勤め。曾て奢侈怠廢の風なし。翁家甚富めるにあらさるも。財用乏きを告くること無く。常に綽々として餘裕あり。故に老ての後も逸豫に漫遊に。自ら意の適する所に隨ひて。聊かも顧慮する所なし。平常用意の周到なるにあらさるよりは安んそ此の如きことを得むや。大口鯛二君嘗て翁を評して『國學の素養深くして。歌に、文に優れし大家といふの外なし。且凡そ國學者、歌人か多くは世事に迂疎なるにも拘はらす。翁の獨り之と異にして、貨殖の道にも長せられたるは。最も出色の點なり』といへるは。頗る要を得たるの説にして、而も未た盡さゝるものあり。

余を以て之を見るに。翁は自信に厚く。忍耐に強く。又事理に活通せり。故に翁は其畢世を通して。常に心を順境に怡はしめしにあらす。其心に滿たさるもの二三にして止まらさりしに拘らす。悠々として逼らす。晏然として自得するか如きを得たるなり。翁か胸中瀟洒にして物に滯らす。寛厚にして命に安んせしこと以て知るへし。余や後進を以て翁の知遇を受くること二十餘年。轗軻不遇にして。往々にして事は心と違ひ。屢躓いて機に猶存するものなるに。翁は之を以て更に其交を儉えす。余は故に翁を喪ふて常に世に復知已なきの歎を發せすんはあらす。

明治三十八年七月二日

辱交　井手今滋謹誌

例言

荻園翁存稿中にては和歌最も多し。加賀の井手今滋尾張の矢部典則二君は翁の年來の知人なれはとて其中に就きて選採すへき任に當られ坂正臣井上通泰の二君は翁の友又は編者の友なれはとて編者の請ひによりて更に又精選細閲することを承諾せられ由りて本書の稿を定むることを得たるは余か翁の遺族を代表して特に此に掲け出て、深く謝する所なり但し其和歌の選採首數か餘りに夥多となりしは遺族としての實情よりいつれも遺棄するに忍ひさるより出てたるにて又其中にて若しも選採せすもかなと思はるゝものあらんにはそは斯道の心得なき編者か間々面白き節あれはとて採りかへたるもあれはなるへし讀者諸子は幸ひに選定の任に當られたる方々を責め玉はされ紀行隨筆等は編者か任意に選ひたるものにて採りたるよりも舍きたるに却つて優れるものありやも圖られす隨筆の如きは翁か數十年間に折々書き附け置かれしを取り集めたるなれは文體も假名使なとも種々にて一樣ならさるも是れ已むを得さることなり

校正の任には編者自から其妻たる翁の子と共に之に當りたれと誤謬の箇所も少なからさるへく察せられ數首の和歌の如きは重複したるもありて疎漏の罪

は編者か深く著者及び讀者に謝する所なり
高崎翁を初めとして朝野の斯道大家か特に編者の請にまかせて題詠を賜はり
殊に坂君井上君か校閲の勞を辭まれさるのみならす或は金玉の序を賜はり或
は自謙して序跋を辭せられしなと其厚意深情は辭を以て謝意を表し得さる許
なり
今や講和纔かに成りしも附版當時出版社會は皆々戰爭にのみあくかれて純粹
文學なとに心を傾くるもの少なきとき裳華房主人か特に此般風雅の事に志篤
く出版の事を快諾せられたるは亦感謝すへきことなり

明治三十八年十一月十二日

編者識

萩園遺稿　目次

第一卷　萩園歌集……一—三五九

文久年中集（萩舍詠藻）……一

明治初年集（萩園詠草）……八

明治十年集（明治詠草一）……二六

明治十一年集（明治詠草二）……三三

明治十二年集（明治詠草三）……三五

明治十三年集（明治詠草四）……三八

明治十四年集（明治詠草五）……四一

明治十五年集（明治詠草六）……四九

明治十六年集（明治詠草七）……六一

明治十七年集（明治詠草八）……六八

明治十八年集（明治詠草九）……七七

明治十九年集（明治詠草十）……八七

明治二十年集……九四

明治二十一年集……一〇一
明治二十二年集……一〇七
明治二十三年集……一一五
明治二十四年集（肝向）……一二四
明治二十五年集（あたりまかせ）……一四八
明治二十六年集（もくつ）……一七三
明治二十七年集（明治集）……一九六
明治二十八年集（筆のまに〳〵）……二一四
明治二十九年集（芥川）……二三五
明治三十年集（ふところかみ）……二四三
明治三十一年集（ちり塚）……二五四
明治三十二年集（玉くしけ）……二七三
明治三十三年集（出放題集）……二八八
明治三十四年集（折々集）……二九九
明治三十五年集（おもひのまゝ）……三一七
明治三十六年集（筆の隨意）……三二四

附長歌……三五〇—三五七
賀歌一首并短歌　讃尾張國作誦並短歌　楠公をたゝへてよめる　唐詩選てふ文にのせたる詩の心を　庚午冬十月聞楓涯梅村景喪悲慟作歌並反歌　登臨大矢田神山作歌並反歌　案山子の書に讃せよと人に乞はれて　明治六年十一月十七日長谷部恕連病死悲慟作歌並反歌　述心緒長歌　明治二十九年二月種痘術發明の百年の辰にあたりて其開祖英國人善那氏の功績を讃美して作る長歌
附今樣……三五八—三五九
曉歸雁　山家春　川口氏の遠つ祖を祭るに　海邊霞　隔水看花　待花月前擣衣　夕蟲
附和歌題名いろは索引……三六〇—四五五
第二卷　文集。浦の藻屑……三六〇
濃厚會社開業式祝詞……三六一
酒酩記（甲）……三六二
五祉考のはし書……三六三
布引の我壹のゆるよしをまをせる文……三六三

堅木舎のあるしの詠草の序……三六五
酒銘記（乙）……三六六
水車のあとかける文の序……三六七
吾母刀自の六十賀の歌の序……三六八
土田重子のもとへ道はす文……三六九
赤澤のたきに遊ふ記……三七〇
上有知里記……三七三
衣笠の里に三浦義明の墓を尋ぬる記……三七五
故従一位源朝臣の柩の御前にまをすまのひ言……三七八
第三回勧業博覧會の記……三七九
名所月といふあとを……三八三
野徑時雨といふあとを……三八四
かまくら郡片瀬に遊へる時の筆すさひ……三八六
江島かたり……三八八
なゐの災にあひて失にし人の靈まつるにたむけの言葉……三九一
つくはねの考……三九三

さつの說……三九四
皇太子殿下功臣をまたひ給ふ事……三九四
隨意莊觀櫻の記……三九五
上有知里人梅村某の槌石の記……三九九
水邊卯花といふあとを題にて作れる言葉……四〇〇
初盤を見る言葉……四〇〇
時鳥をたつぬることは……四〇一
朝子規……四〇三
紅葉をまつ言葉……四〇三
長良川にて鵜つかふわさをかける繪巻物にかきけること葉……四〇四
銀婚式の祝詞……四〇七
けいしの考……四〇八
三田洞にあそふ記……四〇九
遊那谷記……四一一
題和歌世話……四一四
詠歌のこゝろをはしかき　柳梅逕櫻鮎川納涼……四一四

山梨縣櫻の大樹の記……四二一
加藤安彦を小田原に訪ふの記……四二三
ふたゝび鵜飼の歌を求むる詞……四二四
寄繪祝歌卷序……四二五
いらさの磯丸の事蹟……四二七
再び磯丸の事蹟に就き……四三〇
勢語讀本の緒言……四三三
丹波笹山孝女のさと……四三五
岐阜末廣座演劇廣告……四三七
蛸の賦……四三九
滝園歌集の奥書……四四〇
仙子歌集序……四四一
井手曙覽翁の傳……四四二
菅沼斐雄か紀行をよみて……四四三
わらひ草……四四四
むかし話……四四五
和歌勅撰に就ての建議……四四九
地租增徴の可否を論す……四五三
第三卷　漫遊日記及紀行
第一山中温泉紀行……四五五—五四九
第二恵の露……四五五
第三東行日紀……四七六
第四鹽原日記……四八五
第五松島の日記……四九九
第六かうつちにき……五〇九
第七京紀紀行……五一〇
第八はまつと……五三九
第四卷　萩園隨筆……五五〇—六〇三
波斗橋。木曾街道。織田家の土木。一里塚。路傍の並樹。堤の樹。租と稅の別。公事
の解義。天正中の撿地。田の測量。王代の量度の制。步制。度制。量制。田制。大貨頃
の課役。庸調の事。位田職田功田の事。令に定めし郡里。古の課役。食封の事。蠶
桑の初。平清盛の土功。尾州家の賑給及土功。治川。漆樹の植付。

楮の植付。麻苧の植付。かなきの小枝。保木脇の里。山あいの稱呼。蠶の事。まゆといふ事。たうといふ事。けふ長くのけ。げれ。村山松根の傳をよみて。歌話數則。加藤ぬしの歌話。正風。景樹。朝子規。作歌の手引草。貫之朝臣の木像。氣のよれ。狂氣を詠る歌。瑞龍公の舊跡。信濃國の神代櫻。淺野瑤泉院の墓所。日本の讀み方。俚歌。甲斐國のうす挽歌。同く麥つきうた。同く田うゑうた。北海道の俚諺。八田知紀翁の文通。敏行朝臣の歌。山口正定氏の話。屋久島の事。魂在頭腦の歌。豐太閤の書簡。伊藤祐命の歌。名古屋監獄に於ける大井氏の遺物。鹽の山さし出の磯。そゞろごと。西行の書。妓王と妓女。武女が紀行につきて。間島多道及び其歌。松平春嶽公の歌。わが友田中惟寅。鈴木朗。紀行文に誌せる地名につきて。本多忠勝の短冊。村瀬澹を訪ふ。

第五巻　租調考……六四
第六巻　大矢田神蹟考……六四
第七巻　美濃奇觀……六五
第八巻　琴責曲鳧鶴鈔……七八
第九巻　明王緣日行合話……七三

萩園遺稿

三浦千春著

萩舍詠藻「文久年中の餘稿」

第一巻　萩園歌集

春

立ぬらしいせの海やかすみ殘れる島山もなし

浪路より春は日ごとに立ぬらしいせの海やかすみ殘れる島山もなし

日すがら木にひかれて吾山のまつは都のはるもまるらむ

霞

あゆちがたこき出てみれは星崎はたゝ一むらのかすみなりけり

ちこの浦や波はおとせぬ夕なきにいとゝ立そふはる霞かな

鶯

まはの戸にきなく鶯いかにして人のをしへぬ春をまるらむ

我やとに鳴うくひすの聲なくは花さかぬまをいかてくらさむ

若　菜

かきわけてけふやあさらむ初若菜雪間まつまに人もこそつめ

殘　雪

まからきの里の春風猶さえて外山おろしに雪そ殘れる

梅

かつふるゝ袖さへにほふ梅か香に花のなさけのふかさをそ知る

柳

六田河波の上白くまらむ夜ををしみかほなる青柳のかけ

早　蕨

山ふかき谷のさわらひ折にあへは都の人の手にもつまれつ

櫻

よし野河水のまら浪立かへりみれともあかぬ山さくらはな

春　雨

いかはかりもえわたるらむ青柳のこすゑけふりてはるさめそふる

春　駒

春の野の小草のつまに引れてはつなかぬ駒もなつきかほなり

をさまれるみよのはるとて遠近の野かひにはなつ駒のかすゝ

呼子鳥

よふこ鳥聲のかきりをつくしても山彦ならて誰かこたへん

まるしなき聲にさりける呼子鳥いつかは春のよふにとまりし

瀧のうへの御船の山のよふことり何にこかれて鳴わたるらん

歸　雁

打はらふものか羽風やたのむらむかすめる空をかへる雁かね

苗　代

なはしろの水はこゝろにまかせけり秋のたのみもかゝらましかは

春されは苗代水のみしめ繩秋にこゝろをかけて引らん

菫　菜

きゝすなく小野の朝露ふみ分てちはらのすみれつむやたれそも

故郷のちはらのすみれことゝはんまめゆはれまはいつのむかしそ

燕子花

立よりて袖ふれましを垣つはた野澤の水の何へたつらむ

藤

ふちの花さきしなひたる汀には浪よりうへになみそたちける

山吹

あかてゆく春のわかれをおもはしとともいはて露けき山吹の花

とまれとはいはぬいろなる山吹もふりすてかたきね手の中道

三月盡

ちりはてゝ花ものこらぬ春なからけふのくるゝは惜くやはあらぬ

更衣

立かへてけさきる蟬の羽衣のひとへそ春のへたてなりける

かきりあれは花のたもとはけふぬきつ染し心をいかてかへまし

卯花

世の中をうの花垣にへたつれとさけは都の人そまたるゝ

ゆふしての色にまかひて神まつる月の名におふ花さきにけり

葵

松たにも老ぬるものをいかなれは千世にあふひの二葉なるらん

時鳥

山人のきゝふるしけんほとゝきすたつねてけふそ初ねとはきく

菖蒲

けふといへはひきも引すもあやめ草かをる淀野にをりやたゝまし

早苗

きのふかもちるをしみし櫻田に水せき入て早苗とるなり

水にすむ蛙もけふはさなへとる賤か田うたにこゑあはすなり

照射

ますらをかさすやまふしの隙白くおかにもあはてあけぬこの夜は

夏山にともしさすなるますらをは秋なく鹿のこゑをきかすや

五月雨

眞木なかす丹生の河波水こえて言もかよはぬさみたれの空

心さへはれぬさつきのなかめ哉雲にとさせる谷の下いほ

日をふれは玉江のまこも水隠れてさみたれけりないまた苅ねと

盧橘

おもひ出もなき身なれともこしかたの猶なつかしくかをる立花

常世よりつたへて今もかくしこそかくのこのみはよにかをりけれ

簟

風そよくさ葉かくれの忘水たえ〳〵見えてゆくほたるかな

蚊遣火

かやり火のけふりを軒に吹きて風もいふせき賤が伏せ庵

蓮

白露のかくてきえせぬ物ならは蓮そ玉のうてなならまし

氷室

うら山し松が崎なる氷室守夏てふこともきらしとおもへは

ひむろ山もるらむ人にことゝはむなつてふ事はきるやきらすや

泉

立かへり來てを結はむ山陰の岩垣清水夏としもなし

かきやれは岩垣きみつよのなかの塵もなかれて涼しかりけり

荒和祓

千早ふる神のこゝろもなこむらんけふは名こしのはらへしつれは

立秋

明ぬるかむすひし夏の夢絶て袖に吹なり秋の初風

七夕

衣手にかよひてすゝしなかめやる星合の空の秋のはつ風

天の川わたりわたらす何かいはんうきたる雲のよそのゆふくれ

萩

秋の野の小はきか花のすり衣きてみぬ人はあらしとそおもふ

萩の葉はいかなる物そ秋風のそよともすれはかなしかるらん

女郎花

朝露を消すもあらなむ女郎花かさしの花と人も見るかに

薄

何事をきのふの岡のきのすゝきほにいてぬ袖の露けかるらん

やとかりしたかなこりとて手枕の野へのをはなのむすほゝれたる

苅萱

かりにのみ人のくれはや秋風にあも引みたるゝ野路のかるかや

ものおもふ人のたくひか苅萱のつかの間もなく打みたるらむ

蘭

わかせ子かきても見ぬまに蘭ひもゆふ露にほころひにけり

雁

天の原雲なきよひの月かけにくまをなしてもわたる雁かな

露

うつら鳴ふりにし里の白露はむかしをおのふ涙なるらん

霧

あちむらのたつはいつこそ霧ふかきすさの入江の明ほののそら

鹽かまのうらわへたつる秋霧やまかきのおまの名をはたつらむ

箱根山朝行駒のひつめより霧立のぼるみぬの岩かと

槿

野分せしあしたあはれに殘りけり草のまかきの朝顔のはな

朝いせはさかりもおらし曉の露に匂へるあさかほの花

駒迎

昼りなき御世のためしと望月のかけなる駒をけふや引らむ

今はばや雲井もちかしあふ坂の山路にかゝる望月のこま

月

山のはを何うらみけん有明の月はあくるそかきりなりけり

擣衣

唐衣つま待かねてうつよはのおとにうらみのかすそおらるゝ

秋寒みつゝれさせてふ蟲の音にもよほされてや衣うつらむ

蟲

いつよりか葛の下葉に鳴蟲のこゑ秋風をうらみそめけん

あきの月小笹か露に影ふけて蟲のね高くなりにける哉

菊

つもりては淵となるへき行末をちきりおくらん菊の上の露

花さかむ秋のかきりはなからへて千年つまむとうゑし菊なり

露おつる菊の下水澄みまされ移らむ花の千世のかけみむ

紅葉

もすのおる片山もとのはしの木はおくれもまたて紅葉してけり

今はとて移らふ木ゝの紅葉かな妹背の山も秋はてぬらむ

むら時雨ふりいてゝ染るくれなゐは秋の梢の色にそ有ける

九月盡

なれきつる月さへうとく成行てやみのうつゝに秋のくれぬる

初冬

音羽山もみちをぬさとちらしつゝ關のこなたに冬はきにけり

時雨

おとたえし萩のかれはの末さわきそゝや軒端に志ぐれきに皃

有明の月は板間をもりなからいかにすきぬる圍の志ぐれそ

霜

おきわたす霜なりけりな小笹原有明の月のかけと見ゆるは

置露も霜となりつゝ草の原更に秋みし面かけもなし

霰

窓ちかきいさゝむら竹打さわきあられふるよはふしそわつらふ

をさゝふく小屋の下ふしさえわひて寐れぬよはに霰ふるなり

雪

ふり初て跡いとふまに庭の雪ふみわけかたくなりにけるかな

槇の屋にすかるたるひの玉簾かゝくる日なき雪の山さと

志からきや槇の杣山いかならんけふは都に初雪そふる

白雲のあはたの山をけさみれは初雪ふれり峯の松はら

寒蘆

なにはかた霜におれふす枯蘆もつのぐむ春や下にまつらん

千鳥

見るまゝに夕汐たかくみつの浦の松原こえてちとりなくなり

氷

をし鳥の浪のかよひ路絶にけり氷やみつの關となるらむ

水鳥

あしの葉にかくれて住し水鳥の床もあらはに冬かれにけり

夢さむる浪のまくらに音つれておなし浮寐のかもそなくなる

網代

ちりかゝる紅葉の色やあしろ木に氷魚のよるさへあかくみゆらむ

もみち葉のとまらさりせはあしろ木にひをへて秋の色をみましや

夜を寒み身をうち河のあしろ人浪とゝもにやもり明すらむ

神樂

舞人の手にとる笹に置霜のさやかに見えてよは更にけり

ほの〳〵と雲井の庭火しらむ夜に猶あか星の聲そのこれる

鷹狩

かりくれぬかへさはとほし箸鷹のすゝのきの屋に宿やからまし
宮人はけふを日なみの御狩とてかたのゝみのゝ雪にきほへり

炭竈

長閑にもたつ炭かまのけふりこそ春にきられぬ霞なりけれ
ふる雪に小野のすみかま堆もれて目にたつ物は烟なりけり

爐火

冬こもり手かひの猫をかきなでゝする業もなきうつみ火のもと

除夜

更わたる鐘のおとこそあはれなれとしも今宵もつきぬとおもへは
いてや世にくれ行年の關もあらはこよひはかりはわれそもらまし

初戀

先にたつ涙はかりを身にそへてきらぬ戀路にまとひ初ぬる

人不知戀

わひぬれは身をうくひすの谷かくれきる人もなきねをのみそなく

不會戀

いつ迄かあはての森の下露を袖にかけつゝものおもふらん

初逢戀

打とけて言葉かはさしにひ枕心あさしときられもそする
つらかりし日ころのうさも忘水うれしきかけを今宵こそみれ
人こゝろかはるも嬉しあすか川きのふの淵はけふのあふせに

後朝戀

明ぬとて君はいにけりかきくらすこゝろの闇は晴もあへぬに
別路の心まとひにかきくれてけさかきやらむ言のはもなし

會不逢戀

逢事もいまはなきさの友千とり跡をのみ見て戀やわたらん

旅戀

いへの妹かまくらの塵やいかならん旅の日かすそいやつもりける
うきたひをまれにまきるゝ折こもこひしき妹をわすれかねつゝ

思

おもひ餘り思はしとはたれもへともおもひすつへきわか思ひかは

片戀

おもへともあいもおもはぬ君ゆゑに片戀すとや人にいはれん

恨

わか袖のなみたの露はつれもなき君をうらみのかすにこそおけ

曉

けふもまた鶏の八聲におき出て君に仕ふる道いそくなり

さらに又鳥の八こゑそあらたなるあかつきことに馴てきけとも

松

苔のむすいはほにたてる老松はさゝれ石にや根さしそめけん

深みとりあふきてそ見る峯の松時にうつらぬこゝろたかさを

竹

うきふしのある世となけく度毎にそよ〳〵といふ窓のくれ竹

むら雀ねくらあらそふ聲絶て夕へしつけき里のたかむら

苔

山ふしの宿るいはねの苔衣すみのころもにしきかさねらむ

千年ふる松の雫や染つらむこけのみとりのときはなるかな

鶴

さくら田はいつこなるらんあゆちかた浦こきくれはたつ啼わたる

浪速かた汐やみつらむさしのほる月の光にたつさわくなり

あゆちかた雲井のたつも浦なれてよはふちとせはわか君のため

ふる雨にたみのの名をやたのむらん島かくれ鳴あしたつの聲

山

あなのなるおきその山の山ふかみひけともつきぬ宮木なるらん

嵐のたつあら山中をこえくれは晴たるそらに小雨ふりつゝ

誰そ此花に紅葉にいとふへきあらしを山の名におほせけむ

川

瀬をはやみ岩にくたけてちる浪の玉野の川をみれはさやけし

かくしつゝ君につかへむ武士の八十氏川のなかれたえせて

御幸せしむかしの影は移らねと今もさやけし芹川の水

野

ゆく末のはるかなるへき大御代のためしとなれるむさしのゝ原

御狩せし奈須の篠原跡ふりてあらしに殘る矢さけひのこゑ

關

鈴鹿路のいまはうまやの名のみにも關としきけはこゝろとまりぬ

まつろはぬ國しなけれは君か代は三の關とてもる人もなし

橋

ことしあらは身をわするへき武士もあやふみわたる木曾の棧

海路

遠近の浪まにみゆる山のはやかよふ船路のまるへなるらむ

旅

草まくら衣手さむし妹か家に太刀の緒ときていつしかもねむ

古郷の人に見せはや明石かたうきねの波の明かたのそら

別

またひこしまゝにおもひのうちそひて別のかたくなりそまされる

立わかれゆくもとまるも隔なくひとつ涙にぬらす袖かな

山家

とはゝやな小柴垣根のかたをり戸山かつならぬ人もこそすめ

山里はいつれかこゝろほそからぬ筧の水もまはのけふりも

田家

いつとなく垣根の小田をもる水のすみよくみゆるまつか庵かな

をかやふく賤か田ふせのこも簾かけはなれても世を渡るかな

懐舊

こしかたの事をあまたにまのふかないくばくならぬ昔なれとも

かりそめのはかなかりつるすさひさへ昔となれはこひしかりけり

述懐

世中もうき身ゆゑこそかなしけれなといやしくは生れ出けむ

秋はてし山田のひたのひたふるにいとはしくのみなるうき世哉

よしや身は數ならすとも君か代にあへるはかりを思ひてにせん

夢

いにしへをゆめにそみつるふりし世のふみを枕のまとのねふりに

無常

いまさらに何かなけかむ世中の常なきことも神の御こゝろ

滿ぬれはかくるならひの月かけや常ならぬよの鏡なるらむ

祝

君か代のめくみの露にうるひつゝ民の草葉もいやさかゆらん

千五百秋みよさかえんと天の下たひらの宮はうつるときなし

春の部

春田家

雨さそふ蛙のこゑのしつかにも霞みてくるゝ小山田のさと

春のはしめによめる

のとかなる風の心にひかれてや柳のいともなひき初らむ

摘春草

かすか野のとふ火の野守今はなし若菜つむ日を誰に問はまし

朝春雨

夜は明てまた起出ぬ閨の内にきく心地よき春の雨かな

春野遊

はるの野に遊ひくらしつねよけなる小草のつまに宿やからまし

歸雁

春ことに歸るとこ世もかりの世とまらて雲路に思ひ立らむ

都花

あかた人みやこの花の陰に來て御世の盛をあふく春哉

馬上見花

乗過てゆくとはすれと立歸り又こまほしき花の陰かな

社頭花

人のよの願ひはすてゝ神垣に花の命をいのる比かな

月前柳

夕まくれのなこりあらせて我庭の柳かうれに月はかゝりぬ

櫻

あらし山花みる人も袖つれていつる盛になりにけるかな

海霞

汐干かた貝ひらふ子か呼かはす聲はかりこそかすまさりけれ

春旅

旅にしてさかまほしきは此頃の都の花の便りなりけり

立春

よをこめて柳引空の霞哉さこそは春のいそき立らし

大政いにしへにかへりぬるとしの春の始に

いにしへにかへるときくも嬉しきを世は春にさへ成にけるかな

夏の部

夏夜

ことし生の竹のよなかく成ぬれとふしのまもなく明る頃かな

端居してふすまもなつの閨の戸はあけたるまゝにあくる夜半かな

鵜川

かゞくたすう舟の篝近つけはみきはまてこそ鮎走りけれ

宵の雨にうかはの水や早からし影亂れ行瀬々の篝火

山路子規

時鳥なれ故まとふ山路ともさらてや雲のよそに啼らむ

湖邊郭公

やはせ船夕こきよれは粟津野の松原とほくなくほとゝきす

夜時鳥

ほとゝきす啼一聲のさやけさにやみの空をも眺めつるかな

夜蛙

手枕に更てこゑこそしめりけれ蛙なく夜や雨になるらむ

驟雨

ゆめの間に一むら雨や過ぬらむさめて涼しきうたゝねの床

涼風入簾

九重のをすのうちまてゆるされてかせは夏こそもてなされけれ

夏夕

松陰にゆふ日はいまた殘れともすゝしくなりぬゆあみしつれは

夏草

朝な〳〵刈にと出つる總角か道さへたとる野への夏くさ

秋の部

岡火

心してかれやあけまき此岡は蟲の聲せぬ草叢もなし

雨後月

さやかなる月に思へは宵のまの雨や桂の雫なりけむ

田家鹿

更ぬるか賤かなるこの音やみて門田に近き棹鹿の聲

杜月

里かくら夕とゝろきも靜まりて田中の森に月更にけり

古寺月

雲ふかき横河の洞の奥にたにすめはすみぬる秋夜の月

野秋風

わかをかの裾野の小笹露見えて涼しき秋の風立ぬなり

故郷蟲

故郷のかやかきけみのむしの聲いつの秋よりみたれそめけむ

野路露

萩すゝき手ことにをりて歸るさの露さへおもき小野の細道

秋の頃物へ行道にて

夕川のみくさの上を行かへりはね輕けにもとふあきつ哉

武儀郡の奥なる山路をたとる事ありしに。朝とく谷に烟のみゆるを。かれは何そと問

ひけるに。鹿火に待りといふをきゝて。

たき捨し山田の鹿火の朝煙のこるもさひし谷の下道

長月の末つかた。山里に物しける道にて。

山賤か垣ほにかけし豆からのむなしく秋も暮にける哉

七夕

かくも世にいひさわかれんいもせとはしらてや星の契り初けん

薄露

秋にあふたか手枕の涙より尾花か露はかゝりそめけむ

月

風ふかはとまらさるらむ淺ちふの露ともまらてやとるつきかな

大空に何のおもひかみちぬらむかなしき秋の月のかけかな

上弦月

おひそ矢のはつかにみえて入にけりまた初あきの弓はりの月

冬の部

聞落葉

手枕のすきまの風に夢絶てきけは木葉のちる夜なりけり

行路霜

かた山のほきの下道ゆふへまて朝おく霜の消ぬ頃かな

雪中眺望

打渡す空のみとりのなかりせはいつこか雪の限りならまし

冬鳥

呉竹の夜半の塒やさえつらむ朝日まち得て雀鳴なり

夜雪

さやかにも見えわたる哉ぬは玉のやみをも雪は降かくすらん

早梅

こゝろときそのふの梅の初花に春やおそきと歎かれぬる

瀧氷

たきつせもあらそひかねて氷りけり寒さや波に立まさるらむ

池氷

冬くれは水はこほりとむすほゝれ池の心のとくる日もなし

山時雨

かへり行くくもに夕日はてりなからしくれふるなりかつらきの山

山家竹

風さむきかた山さとの北おもてたかむらならぬやとなかりけり

戀の部

懸命戀

なかれよるあふせもあらは水の沫のきゆともなにか身をはをしまむ

相おもふ

あひ思ふ心のたけもくらへ見むふり分髪はかた過にけり

寄篠戀

下毛やなすの篠はら忍ひてもあふへきふしのあらはこそあらめ

寄月戀

宵宵に袖の露とふ月影も心のやみはてらさゝりけり

寄瀧戀

思ひせく心のたきのいつのまに洩て我名の世になかれけむ

寄玉戀

石と見て世に捨られし璞のしられぬ戀はくるしかりけり

雜の部

明治六年一月。おほやけことによりて。美濃の國内をめぐりける時。高須の里なる吉田利和か家にやとりけるに。あるし『あしのやのあまか磯屋のかりまくら一夜もいかに明しわふらむ』とよみて出しけれは。

わたくしの旅ならませはあしのやに夜を重ねてもたひ寐せましを

孔明

千よろつのあたに向ひてひく琴はいくその弓の力ならまし

山家水

淺けれと岩井の清水濁らぬを心とすめる山蔭の庵

郡上なる大野春彦か許へ文のついてに。白雲水の故事なと思ひつゝけて。よみておくりける。

水くきの跡を傳へて宮瀨川きよき流は君や汲らむ

山家嵐

志つかなる心の奥は吾山のあらしもさらぬ住家なりけり

みやことり

すみた河つひに都とならむ世をかねてや鳥の名にはおひけむ

吉田利和か。妻のうせにしころよめる歌の中に。『春にあはゝまたわか草のつまなるを、根さへかれ野となりしわきも子』とありける。いと哀におほえて。

かれにけむ妻そ悲しき春にあはゝ又わか草はもえも出ましを

鹽屋烟

立のほるけふりの末に見ゆる哉をほやく蜑の心ほそさは

源頼朝

鹽たれしひるの小しまの蜑か袖つひには世をもおほひけるかな

伯牛牙

今はまたきく人なしとたちし緒の響いつまて世に殘るらむ

長良川を船にてくたりける時。古津の里なる鏡岩といへる大いなる巖のあるを。立より見て。

世とゝもにおし移るらし鏡岩昔のかけは見えすも有かな

はゝそ、つた、はし 物名

もみちはゝそれとも見えす立田山けさは時雨のかきくらしつゝ

山　家

いつくにか世をはそむかん奥山もなけきこりつむ所なりけり

無　常

生るれはかならすまぬるならひこそさためなき世の定めなりけれ

伊勢人何かし。はしめて問來て歸るとき。よみていたしける。

いせの海の有磯によするまた海松のまたも見えなは嬉からまし

松不改色

移りゆく世のさか山に生なから松は色こそかはらさりけれ

志摩國にものせし時。こふといふ海邊にやとりけるに。夜もすから目もあはて。

こふの濱いそもとゆすりよる浪のおとを夜一夜きゝ明しつる

こそは三重縣下の暴徒あまた。わかみのゝ國石津多藝のあたりにおそひ來て。はから

さるさわきなりしも。やかてことなく靜まりて。あたらしき年にうつりぬるを。よろ

こひ思ひける折から。一月二日の朝。雪いと白くふりけるをみて。

舊年のちりのさわきの跡もなく降り清めたる今朝の雪かな

末廣町の秋葉の社に櫻の木あまた植ふさせて

山櫻ことしはあまた植なへて秋葉の宮を春になさはや

故植松大人の靈前會。乘題に。寄松懷舊

萬代にかたりつくへき君か名を松のときはにかけてしのはむ

二月のはしめつかた。鹿兒島のあかたに。さわかしき事ありと聞て。

隼人のせとの高汐さしくめり西ふくかせに浪のおとそする

月と日の御旗なひかは鹿子自物膝折りふせてまつろはしやは

西京なる白鱗舍拾山といへる俳偕家か訪來て。機圓集といへる句集やうの物を見せける

中に。そのをのこか句に。『寒月にてりすかさるゝ思ひかな』とあるをみて。口すさみける。

目に見えぬ人のこゝろの隈までもてらせは照す月の影かな

長瀨里武井氏のなくそちの賀に

かねてよりつみし財のおきくらに猶つみそへよ千世の齡を

八月十九日。岐阜を立て京都に至らむとす。朝とく家を出て。河渡美江寺赤坂垂井關ヶ

原を經て。午須驛に午食す。爲相卿の歌に『よちのほる峯にひとしく立出ていまするみ

ゆるやまもとの松』といへるは。此あたりの事成へしと思出て。

いにしへの跡を尋ねていますすきて行杉の下みち

柏原醒ヶ井を過て米原に着す。廿日朝。とく此湊より汽船に乗て。琵琶湖をわたり。大津に至る。波おだやかにして船いとはやし。

比良やそれ堅田やこれとめをとめて見るほどもなく船はてにけり

宇治に物して。平等院扇の芝の古跡、槇の島。すへてこのあたりの名ある所々を見あるく。橋は今はなし。船渡りなり。

かねてより心にかけて來つれとも跡さへ見えぬ宇治のはし姫

ものゝふの先あらそひて渡りつる昔も遠き宇ちの川かみ

東山なる招魂社にまうでゝ。木戸孝允ぬしのおくつきをかみて。

世の守り人のかゝみとあふかれし人もかくこそはかなかりしか

いかはかり心にかけておぼしけむさつまの迫門の浪のさわきを

九月二十三日皇子御降誕ありけるよしつたへうけ給はりてよめる 北あくる日四郷等ほろびうせにけり

あれましゝみこの御いつは西の海の治まる浪のうへに見えけり

島崎正樹か『さもあらはあれ世のうきくもはかゝるともこゝろの月もさやけかりせは』といふ歌をよみて見せけるに。

雲さわぐうき世はなれて空たかく澄らむ月の心をそおもふ

三一

遥月尼の一周忌のうた

遥の葉の露にも月はやとりけり消にし人のかけはいつくそ

都にのぼりけるとき。道にてよめる歌。思ひ出るまゝ。一首

うら安き御代の旅とて夢にたに草の枕はむすはさりけり

紅葉淺といふことを

大はらやまたきもみちの山口におくある秋の色をしそおもふ

遠山雪

あかし潟浪か雲かのうたかひも雪にはれゆく紀路の遠山

ゆけと〳〵同し雲ねにあふかれて見えぬ日もなきふしの白雪

安江靜かよませける招魂祭の歌

物部の道に捨たる玉緒のひかりは世々にたえしとそおもふ

捨し身の今また神とあふかれてふたゝひ君か代を守るらむ

御世ほかひうた

天の下よもにかをりて櫻田の千世田の宮は今さかりなり

枯野朝

ありと見て手にもとられすかけろふの小野の枯生の霜のはつ花

三二

月前網代

てる月は歟かとまかふ網代木に氷魚はかりこそよると見えけれ

閑居初雪

かくれかのこゝろをしりてふつかにも積れはつもるけさのはつ雪

夜雪

さやかにも見えわたる哉ぬは玉のやみをも雪はふりかへすらむ

鶯入新年語

鶯もとしの初音やいそくらん人のこゝろのまつにひかれて

立かへる年に引れて小松原初音をいそく野邊の鶯

待花

雪ならぬ花の盛をまつほとの日かすもいたくつもりぬるかな

澤若菜

ふかすかに野澤の氷ひまありて若菜つむにはさはらさりけり

竹間鶯

葉こもりに鳴とはすれと鶯のこゑ竹むらにかくれさりけり

海邊霞

わたつみの沖縄島も日の本のあまる光にかすみ初らん

夕花

鶯もねくらに歸りはてにけりいつまてわれはなにうかれむ

歸雁

打つれて歸る雁かね古郷をおもふこゝろやひとつ成らん

雨中柳

わか門の玉のを柳春雨の露ぬくときの名にこそ有けれ

月前落花

月花のかきりふくれて有明のかたふく空にちる櫻かな

長良川の鵜飼を

長良川たえぬ鵜船の篝火に今も昔の影は見えつゝ

郡上郡をめくりありさける時

夏草の野尻の山をけさくれは道もさりあへすおける白露

山高み道ゆく人の越かねてあなう坂とやいひはしめけん

（こは鞆坂といふ所にてよめり）

岩根ふみわけゆく道も白雲のふもとにがくるほりこしの道

八幡にて大野春彦に逢ひてよめる

夏木立まけるる端山をふもとにて空に雪ふるこしの白山

種おろす頃になりぬと山かつは若葉かりしき田にたてる見ゆ

井手今滋か父の故曙覧翁の十年祭に。寄月懐舊といへることをよませけるに。

めくり來て昔まのふの草の戸に其夜なからの月もとひけり

又同そり。曙覧か詠草の中に。『露しけき苔路にひとり月をおきてさへれなものか夜半の柴戸』といへる歌あるをおもひ出てゝ。

みし人はいつちいぬらむ露滋き苔路にひとり月をのこして

ことし十月。末つかた。岐阜縣に行幸ましく〳〵けるとき。よめる歌とも。一首

御輦のまるしのみはたみえ初てまつかにひゝく駒のつまおと

岐阜行在所に御着輦の日。あやにく雨ふりけれは。

御くるまのわたる空よりふる雨に大路のちりはきよまりにけり

御民われいけるまるしのある世とは此いてましをあふきてそしる

關の藤川を

心あらは關の藤川すみまされ大御くるまの影さやにみむ

行幸をかみてひとり言に

老ぬとて何なけきけんためしなき行幸あふくも命なりけり

老人に物をたまふ

かしこしや老木の枝の末までもうるほひわたるあめのたまもの

遠江國なる周智郡小國神社の月次會の題。名所鶴をよめる。

白雲に羽ね打かはし久かたの天の中川たつ啼わたる

上有知に物しけるとき

おくらやま木の下庵に住なれてみし世戀しき月の影かな

明治詠草三〔明治十二年稿〕

新年祝言

ふりにけるためしを引て新しくいはふやとしの始なるらん

朝とく鶯をきゝて

あさいしてきけはそのふの霞も花のねくらにいまた鳴なり

ある人の追悼會に。寄花懐舊。

思ふとわすれて花を見る人もあるらんものをかなしかりけり

あらし山のかたに

あらし山松はあらしのやとりともしらてや花の枝かはすらん

源三位頼政卿の七百年祭に。月前郭公といふことを人のよませけれは。

弓はりの月にひかれて郭公鳴はむかしのかけや戀しき

琉球藩をとゝめて沖繩縣をおかれけるよし聞て

世の人もこゝろをこゝにおき繩のあかた司や身をくたくらむ

長良川の桃の花みにまかりて

仙人のすみかやいつこさく花のにほひにかすむ水のみなかみ

武井芳矩の五十賀しけるに。寄渡祝といふことを。

萬代もなかれて盡ぬ長瀬河ちとせはちかきわたりなりけり

桑原道衛か竹の子をもて來ておくりけるに。歌をそへたれは。それか返し。

手折來て君より我にくれ竹のこの一節そ嬉しかりける

野歡會主のもとめによりて。平清盛を。

あはれ君和田の築島造りけむ心に世をもをさめましかは

舊き反古の中より見出たる歌

心にかなはぬ事ありける頃。岡田輝常のもとにいひやりける。

おほつかな難波のことにたゆたひて蘆分船となれるわか身は

關花

吹かせをなこそと思ふ關守の心もまらてちるさくらかな

十一月中頃。吉田利和か母なくなりぬときゝて遣しける。

露をたにいとひしやとの柞葉にあらしたちぬと聞くはまことか

利和かへし今は世にあらしのおとのうらみのみ殘るはゝその冬かれの宿

養老瀧

田跡の山御幸絶にしたきつせの波も昔に立かへらなむ

養老山の垣衣石といふは。志のふ草の形のあらはれたる石なり。

多度のやま千世ふる谷の忍ふ石志のふも久し君か御ゆきを

たとの山ふりし御幸のあととへは昔志のふの石もありけり

遠き代のみゆきやいまもしのふ草ほにいてゝ石のいろにみゆらん

社頭梅　小國神社月並獻詠一月題

はふり子かとる玉くしもかをるまで

一月三日の日。伏島頼之か娘の身うせけるよし聞て。とふらひつかはすとて。

立かへる年にたかひていかなれはかへらぬ旅に君はいぬらむ

朝鶯　二月廿五日夏夜海の家に直輔景昌秋篤なと集ひて歌よみけるときの雑題

今朝きけはまた新くなりぬなりきのふも啼きし鶯のこゑ

わかな　同當座

きてみれはまた雪間なる初若菜いつ七くさの數はつまゝし

春ことに老のかすそふすさひともきらでや人のわかなつむらむ

雨中鶯

きら露の玉のを柳打したり小雨ふる日に鶯のなく

三月十四日。舟にて長良川を上有知の里へのぼるとて。

引のぼる小舟のつなの長き日も霞かゝるまて成にけるかな

同き十五日の夕さりつかたより。田中康忠か家に人ゝつとひけるに。夕霞といふことを

よめる。

かすみたつゆふへに見れは小倉山ちかきも遠き心地こそすれ

其をり。阿部直輔か『駒にけむ君にとはれて有知の山昔の春や思ひ出つらむ』とよみて出しける。かへし。

うちの山なれし昔の春もあれとこよひにまさる時なかりけり

田中氏の高との眺望いとよけれは

打向ふ藤城山の山松の千とせは宿のものにさりける

春月

をとめ子か面かくしせしさまなれや霞の袖に匂ふ月かけ

岩間藏六庵か七十あまりにて。身まかりける忌日に。寄水思往事といふことを。

みし人のかけこそ見えぬ山水の岩もるおとはかはらさりけり

けふといへは水さへ物をおもふらん岩間にむせふおとの悲しさ

路もなき苔路たつねて岩清水むすふもけふの手向なりけり

關路秋風　八月十二日四京なる村山松根か岐阜に來けるに伊奈波のふもとなる亭に人々つとひて歌よみける當座

わかるとも又逢坂の關まては ふきたにかよへ秋のはつ風

秋かせに車のちりをはらはせて明日か越らむ不破の關山

初秋月 全

大かたの桂の一葉あきかぜにちるかと見ゆる三日月のかけ
今よりの秋のあはれは三日月のまゆにこもれる光なりけり

高田建彦が高とのにて。春隆松根古道なと、。酒のみかはしける夜。

なから川見えぬ鵜船のかゝり火を思ひこかれてまつ夕かな

十月十七日。養老の公園の開園式によめる。

今つくる多藝の花園ことしより御代と、もにや開けゆくらむ

殘月越關

關こえてかへりみすれは箱根山あとにのこれる有明のつき

浦秋夕

心なくすめはこそあれ須磨浦のあまの磯屋の秋の夕くれ

服部太助か父の七十七の賀によめる

七十のうへまて越し年波のよるせや千よのみなとなるらむ

山階二品宮よりおのか著せる美濃奇觀を御覽して。『稻葉山われをまつとはさかねとも
こゝろにかゝる峯の白雲』とよみて賜はせたりける。いとかしこくて。村山松根のもと
ていひつかはしける。

伊奈波山心にかけしかしこさをあふくにあまる峯の白くも
いなは山峯の白雲あふきつゝ松とやいはんかしこけれとも

秋の歌とも

萩の葉に曉露やしけからしめりはてたる風のおとかな

歲暮述懷

五十あまりなすとなくてくれ竹のよをむなしくや朽はてぬへき

明治詠草五〔明治十四年稿〕

御題。竹有佳色

かきりなく竹の緑のみゆるかないく世こもれる根さしなるらん

河邊雪

跡つけて行かんはをしきけさの雪其舟よせよ淀の川をさ

馬車

御車のおそきはうしとひらけ行御代には馬のつかへけるかな

冬獸

さゝとほるふすまのもとに猫の來てなれも此夜をねうと啼なり

大坂より神戸に行く道に。住よしといふ所あり。そこに住吉神社あり。汽車道なれば停車場あり。

舟よりもはやきくるまの行かひを陸にもまもれ住よしの神

二すちに瀧はわかれておつれとも清きこゝろはひとつなるらん

不破關をすぐとて。こは有島行のときの歌なり

石すゑの跡も今はなし不破の關にし後もいく世へぬらん

祉頭曉 これも右におなじ

宮人の御餉とゝのふと御たらしの氷をたゝくあかつきのこゑ

宮つこか明星うたふ聲のうちに神代おほえて明るそらかな

雪中若菜

いさけふは若菜つまんと出てゝ來し道のそらより雪はふりつゝ

寄雪述懷

いたつらにつもれる年をかそふれば雪もわか身もふりにけるかな

朝霞

あさ日かけ今やのぼらむ山のはに匂ひそめたる薄かすみかな

花雲

よしの山奥ある花の白雲はふもとよりこそかゝりそめけれ

毋より衣つくりておくれるをよろこぼひて

たらちねの心つくしのわたの衣あつき思を身にそへて着む

村山松根のもとより『おもひやることゝろはかりは隔てねと雪ふかゝらしみのゝ中山』と

いひおこせける。かへし

思ひおこすふかき情にくらふれはまた雪淺しみのゝ中山

筥根の溫泉

世の塵もすゝきされはや箱根山わきていて湯のすゝしかるらむ

寄柳祝

年をへし柳のいとのなかりせは永きためしに何をひかまし

石川依平翁の追悼會に寄柳偲昔といふことを人のよませけれは

思ひ出て跡とふやとの緑柳けふはなみたのたまをこそぬけ

植おきし門の柳のいとみれは年の緒長きかたみなりけり

蔭ひろく繁りし門の青柳に今もむかしの風はのこれり

豐島夏海は業のいとまなき身なから。常にこゝろをまさゝまのみちによせ。又佛のをし

へをさへしたひて。いとゆかしき人なるか。年ごろわつかなるいとまのひま〳〵に。此
經文をかくうるはしく寫しいて、。其おくに人々のことの葉をもとむるに。おのれもし
たしき中なれは。かれかこゝろさしもたしかたくて。かくなんよめる。
よとともにてらす御法の空の月うつすも清き水くきのあと

落花

ちる花の行へはそことしらねともをしむ心をたくへてそやる

有馬温泉にものしける時。そこにて遠江國池新田村なる丸尾文六といふ人にしたしく
なりて。ましはりけるか。おのれまつ歸るにのそみて。わかれのうたよみて遣しける。
君かすむ遠つあふみはとほくとも又あふみてふ名をはたのまん
かへしあすよりは遠つあふみのへたつとも心のまことかよはさらめや

京にてみやこをとりてふ舞を見ける時

都ふりうたふをとめか袖みれは柳さくらも色なかりけり

那先比丘問佛經云。那先言船中百枚大石。因船故不得沒。人雖有本惡。一時念佛用是不入
泥犁。便生天上。何不信耶云云。この心をよめる。
舟しあれは石さへ水に浮ひけりつみおもしとてしつみはてめや

吉田文行の前栽の櫻の枝を折ておくりけるに

手折こし情もふかき庭さくらあるしからなる色は見えけり

古寺

あはれ又けふもきのふと成ぬなりあすかの寺の入あひのかね

ある人の追悼會に萍といふことを

行水に其根たえにし浮草はさそはれにけん方もしられす

鏡

年年に老まさり行わか影をなれしかゝみもあはれとや見む

有馬の皷の瀧を

有馬なるつゝみの瀧の打はへてたえすも布を誰さらすらん

渡忠秋か追悼會に。曉露といふことを。

明かたの雨はせを葉に音すなり破れし夢の跡やとふらむ

九月廿三日。東京なる高崎正風來て。其夜長良川に。鵜飼みるに。井手今滋とともに。其船
にいさなはれてよめる歌。又其まへに贈答せし歌とも。

あはむ日をけふかあすかといなはねのまつほと久に成にけるかな

正風かへし君かけふ松ときかすはいなは山いなむと明日はおもひしものを

歌物語しける時

今の世に君なかりせは敗島の道のおくのを誰に問まし

かへし誠たにふみたかへすは敗島の道には奥もあらしとそ思ふ

船の中にて

こよひしも君まちつけて鵜かひ人うれしき瀬にやかりさすらん

さちあらむ此夕やみをいのちにて下すうかひか舟きほふなり

かつく鵜のおに一口にくひてけりやみの夜川の底のいろくつ

廿四日。高田建彦の家にて。正風發景敏古道夏海潛なと集ひて。歌よみけるに。河秋望。

長良川浪間にしつむ夕日影みる〳〵秋にうつり行かな

夕されは涼しくなりぬ秋風もたつか長良の川波の上に

正風の老たる母をともないてふりはへ。養老の滝布に物すなるは。いとよき心はへなりかし。

瀧つせに老のなみさへ立かへりわかえむしるし君こそはみめ

養老にて。正風利和春隆靜夫等つとひて。山館秋來といふことをよみけるに。同し心を。

山たかみ軒端をめくる白雲のまらすいつより秋に成けむ

みやひをか此山かけにつとふ日を空にしりてや秋もきぬらむ

又其時の歌ともをあつめたる巻を見て

萩薄千くさはあれとたきの野に先さく花は言のその花

長良川に正風と舟うかへける日。其母刀自の七十にあまれるか。いとすくよかにて。けふも此舟に物して。船より浅瀬におり立ち。足さしぬらして。いと心よけに物せらるゝを見て。

長良川水にうつりしはゝそ葉のかけ千とせまてすみ渡るらん

磯野直温か尾張の大野といふ所に。鹽湯に行て歸りて。ほとなく身まかりしとき。

知多の浦にみちてはひぬる汐をみて定めなき世やかねてしりけん

父翁の心をくみて

生たゝむ孫の行末待のみやせめても今のたのみ成らむ

故郷月

すむ人はすます成にし宿なれとすむ月かけはすみまさりけり

八月三十一日。天野景昌が身まかりぬるよし。つけおこせけるをきくに。そゝろ涙もよほされて。

馴なれし十年あまりのましはりも一夜の夢となりにけるかな

牧童吹笛

またかりて牛の背にふくあけまきか笛の音さひし秋の夕くれ

忘貝中なる歌をみて

をりにふれ思ふこゝろをうたふこそ歌てふことのはしめ成けめ

賀島なにかしか母の追悼に。寄鏡懐舊。

有てなき世をもしれとやます鏡影たに人のとゝめさりけむ

ことし彌生の頃。京都にて山本何かしか催しける。柿本大人靈前會の題花雲といふ事を。

よしの山おくある花のまら雲はふもとよりこそかゝりそめけれ

十一月の末つかた。加納のもとの城主永井尚服ぬしか。加納に來られけるに。よみてお

くりける。

かけおきし惠の露のあまり有て今はたなひく國の民草

菊

いかなる折にか

うきめのみ苅にしそそか島人もみよの光をいまやあふかむ

秋ことに老せぬ菊はかさせとも花にもあそぬ我身なりけり

さきつ年。田租の制をあらためたゝさることに、いそしみける人々あまた。こたひ大

やけよりたま物有けり。さるにそのかみ倶にいさをありしも、今世になき人は。此たま

ものにもれたりけれは。いとかなしくて。

なき人のまつまのはれてたま物をうくる袖にもちるなみたかな

御惠の露はわか身にあまりけり苔の下にもかゝらましかは

河水久澄 御題

明治詠草六〔明治十五年稿〕

水上のすめは下まて隅田川きよきや御世の姿なるらむ

年をへて澄こそまされさやかなる御代を心の玉かはの水

新年松 清書社一月題

年も今立かへり來ていなは山さらに時めく峯のまつはら

國會をよめる

君か代はやすの河原に神はかまはかりし跡も今やおこらむ

電信

千さとにもうてはゝえつ天飛や雁のたよりも今はたのまし

初春のはつなもまたて枯にけり松は千とせと思ひしものを

二月六日。故天野景昌の追悼會を蓮生寺にて豊島夏海か催しけるに。兼題夕千鳥を。

思ひいてゝ我も音になく夕暮に友なしちとり誰よはふらむ

早梅　全上當座

いとはやも咲にけるかな梅の花をりてことしはたれにおくらむ

山家經年

わか山に行てはかへる雲をのみ送りむかへていく世へぬらむ

山をよめる

世中をいとひもはてぬ身なれとも心は山によせてけるかな

梅

こと〳〵はぬ木にはあれとも梅の花かをれはゆかし閨の手まくら

隣家鶯

わか宿のものとこそきけうくひすの聲する梅は隣なれとも

朝鶯

朝くもりまた明ぬ夜と思ふらむねくらなからに鶯のなく

豊島夏海か六十一の賀しけるに。海上鶴といふことをよめる。

老らくの波も今年は若の浦に立かへりなくあしたつのこゑ

ありそ海の濱のまさこをふむたつのちよの跡こそさやに見えけれ

寄竹祝　當座

かきりなく竹の緑のみゆるかないく世こもれるみとりなるらむ

寄橋戀　同

久かたの天のうき橋はやくよりかけはなれても戀わたるかな

春　月

はる霞かすみて暮し山のはに匂ひ初たる夕月のかけ

山のはのかすみは立もおよはねとなほおほろなるはるの夜の月

此夜鹽谷さく女の琴ひきけれは

をすの外にたえ〳〵もるゝつま琴のまらへもかすむ春夜の月

田中康忠か七十賀に寄山祝

不二のねものほれはかきりある物を君か齢そはてはしられぬ

故松蔭大人の影前會に。朝花

朝な〳〵さくらのもとに來てみれときのふの人はけふなかりけり

小國神社の修繕なりて歌會催しけるに。社頭祝といふ事をよませけれは。

白玉のをくにの宮ゐあらためて千世のひかりやみかきそふらむ

社頭花　四月

祇園の春のいかきの八重櫻八重垣つくる雲かとそ見る

手もふれぬ神のみまへの櫻花梢なからのねざとこそ見れ

社頭落花

いまはとて神のいかきもこえてちる花のいのちのをしくも有かな

風まもる立田の神のこゝろにもまかせぬものは櫻なりけり

橋上霞

白玉のをふさの橋はたえにしを霞いく春立わたるらん

かつらきの峯は明てもなほ夜をしむ久米の岩橋

四月廿一日の日の二時過る頃。廐よりまかりけるに。けふはそらもいと長閑なれは。三田洞の上なる弘法大師にまうて待らんはいかにと、妻のいひ出たるに。をさなきをんな子の耳とくきゝて。はやう其心になりて。何くれいそき物すれは。今はえしもいなまて。おのれも出たつとはなりぬ。かくて長良川にいたれは。此頃の水に板橋なかはくつれおちて。舟わたしなり。川上とほく打かすみて。いなは山舟ふせ山なとほの〳〵見ゆ。

長良川夕東風ゆるく吹おちて雨ちまけにも霞む空かな

道のゆく手の田に。紫匂ふ花むしろ敷なへたるは。けむけといふ草なり。我車に合乗させたるをさな子の。桃しりになりて。あはれ花や花やと手をさゝけて。おりたゝまくすれと。かへさにこそと。おしあつめて。やう〳〵そこを行過きぬ。

すみれ咲くをりすこしてと思ふらん苗代小田もいまたかへさす

こは或人の說にふるき歌にすみれとよめるはそのけんけ花なるへしといふによれり

岩崎の里を過るとき

心なくやり過したる小車の跡したひきてちる櫻かな

此あたり行々車のうへより見れは

賤のめか機おりうみて見出せるかや屋か庭につはき花ちる

里の子か馬引てゆく土橋のくつれにさけるたんほゝの花

やう〳〵四時過る頃三田洞にいたりつきて

來てみれはまた入相にならねとも木かけをくらき夏の山寺

山をあさりて

さわらひはまた手も出さすみた洞の山ふところをかきさくれとも

鶯のこゑさこゆ

みたほらの霞の奥をとめくれは小船か原にうくひすの鳴

山にのほり谷におりて打みるに。櫻はちりすきぬれと。岩つゝしなと花さかりにて。青葉のかけいとよけれは。巖の上におりゐぬて。かれいひたうへなとするほとに。空いとをくらくなりて。ほと〳〵こほれきぬへうおほゆれは。心のこして立ぬ。

世の中はあなあやにくやたま〳〵に來つれば空のくもりぬるかな

たま〳〵にいつれは雨のふるといふ世のとわさはまことなりけり

かへさは車もいとはやくて。例の口おもなるえせ歌なと。打かたふくひまもなく。はや

ふもと村にいたりぬ。このあたりより雨ふり出たり。

あまりにもうらゝかなりと見えし日の夕くもりして雨こほれきぬ

されともいたくぬれすして家には歸りつきぬ。ありしとも忘れぬほとにてかくなむ。

題志らす

山川の波のをにこそかゝりけむ琴柱にまかふ松のこほれ葉

中津川の人市岡政香か祖父正藏の七十の賀に。寄山祝といふことを。

惠那の山ふりさけみつゝいや高き君か齡を空にしるかな

久かたの雲ゐに高き惠那の山君か齡もかくこそあるらし

山家松

世のなかの春秋志らぬやまさとのまつも老木となりにけるかな

このもとをしめて結へる庵なれは松こそやかてあるしなりけれ

保守黨

かくはかり移り行世にかゝ見山うこかて立る何のこゝろそ

曉雲

夜もいまや明わたるらむ箱根山ふもとの雲に鳥か音そする

松井八澄かゝきたる書巻物に歌よませけるに。歌作りを。

敷しまの歌のあら巢田心もて造るはやかてあらすなりけり

同く輕業

見る人の目さへくるめく綱のうへ是も世わたる道の一すち

同みづしめ

けふはこゝ昨日はそことあすか川なかれわたりの水しめそうき

同く豆腐賣

もえ出る春のをかへの木の芽よし梅さく頃の沫雪もよし

同く農夫

雨風も時をたかへぬみよにあひてしけるや民の草葉なるらむ

首夏風

蟬の羽の袖吹かへすあさ風のすゝしき夏に成にけるかな

ゆく春をしみよわりし轉寐の夢吹さます夏の朝かせ

花ちりてむなしき空にたちにけり香も香もなき夏の朝風

盧橘薫

いかなれはかくの木のみのかくはかり昔戀しき香に匂ふらむ

夜郭公

ほと〳〵きす忍ひ音もらす夕暗は月夜より社うれしかりけれ

夜川たつ人や聞らむ時鳥此夕やみにもらすしのひ音

むら雨の雲間の月の匂ふ夜にしのひあへすや鳴ほと〳〵きす

寄螢戀

志のふ草葉末に生る夏蟲もおもひよりこそあらはれにけれ

山夕立

あたこ山夕たつ雲の風さきにふらぬ都もすゝしかりけり

夏月

岩ねこす清瀧川のはやきせにやとりもあへぬ夏の夜の月

山花 大津のなにかしかもとめなるよしにてあはしかよさせける五題の歌とも

のとかにも見えこそわたれ春の日の長良のやまの山さくらはな

河邊夏月

更ぬるかすゝみのほかけ消はてゝ月になりゆくかもの川なみ

秋夕

打わたす片山はやし霧こめてもすか音さひし秋のゆふ暮

行路時雨

そほち來て野中の松の下陰にとまれは過るむらしくれかな

湖

おきのしまこきたむ小舟こゝろせよ比良山おろし吹たちぬなり

水海はみちひる時もなきものを何そは名のみまほつから崎

萩初開

をしかなく野へを隣にすむ庵のかきねのまはき咲初にけり

暮秋鹿

小萩原秋も末葉の夕霜に聲さへかれてをしか啼なり

鳴てたにをしむにとまる秋ならはいさ我もまか聲たてゝまし

謫居拜衣

御惠をあふく御けしのあやなくも物おもふつまと成にけるかな

伊勢阿濃郡長福井邁が父朴齋の八十八の賀に

いせの海のあの〳〵松はらはる〳〵と見えこそわたれ君か千とせは

山本操が母の七十賀に

打わたす遠山もとの柞原はる〳〵みゆる千世の色かな

九月末つかた。井手今滋のもよほしにて。斯波有造野村晋とともに。篠か谷なる龍興庵にもの
して。東京なる佐藤誠にはしめてたいめしして。打物かたらひけるに。其日しも葉月望の夜
にて。くれゆくまゝに。月くまなくさえわたりて。いと面白かり。其折からよめる歌とも。

くれぬまにいでゝ来つれと月はとく山をはなれて我を待けり

相見むとかけし願ひも月影もみちたらひたる今宵なりけり

くまもなくすめる月かなおもふとちかたる心もかくこそ有けれ

めつらしき君かみかけのさしそひて今宵の月も澄みまさるらむ

又物かたりにこゝろいれたるをりは

相對ふ君かみおもをめつらしみ月は忘れてかたる夜半かな

柁樓吹笛といふ題を

つくしかた有明の月のおちしほに笛の音いかにかなしかりけん

老たる松を

高くのみ松のよはひの成ぬれは枝はかへりてつちにつきけり

朝鮮人謝罪のことを聞て

あな涼し鶏の林の草も木も吹なひけたる秋つしまかせ

晩鴉

川おもてのなかれ洲先にふたつみつ水あひてをる夕からすかな

秋夕

露よりも思へはかろき身なれともおき所なき秋のくれかな

十五夜

望のよの月にも雲のさはり有てみたぬは人のねかひなりけり

間島冬道の愛知に來ゐて。十月四日ころに。問むといひおこせけるか。おともせさりけれは。

来むといひし人はおとせていなは山松にむなしき秋かせそ吹

待こてけふも暮けり夕からすころくてふ音もいまはたのまし

冬道よりかへし

いなは山みねのまつとはしりなからけふも秋風うちしくれつゝ

くもり日の秋の梢の夕からすこゝろくと鳴てこそをれ

此をりから。愛知なる山本晴明より『雨ふれはゆかてやみぬる心をもつくる鴉の聲とし
らすや』といひおこせる。かへし。

雨ふれは待へからすとつけもせぬ鳥のおふにはいかてしらまし

眞淵大人の靈祭に。夕紅葉といふことを。

夕日さす高嶺の紅葉てらさすは下草いかて秋をしらまし

八田知紀翁の十年祭。鹿兒島にて行はれしに。蟲告秋といふことを。

昔おもふ夕の露に啼そめてあきになりゆくむしのこゑかな

おき初し淺茅か露をなみたにて秋をかなしむ蟲の音そする

菊

きくの花老せぬいろときく物をかしらの霜になにまかふらむ

いせ人の賀によめる

いせの海の千尋たくなは打そへてなかきや君かよはひなるらむ

栁橋衛平か母の八十八の賀に

君か齡よねとしきけはことしよりはかりしられぬ世をそへなまし

ことしきるとかきの竹の世も永くいはふやよねの齡なるらむ

秋爲か一年祭に田上寒雁

おく露も霜となり行小山田のいな葉かりそ啼なる

村山松根か一周年祭會。尾崎寅夫かもよほしけるに。暮山雲といふことを

消にけむ煙のすゑはしらねともゆふへさひしきみねのうき雲

峯を出る雲は心もなからめとなかめにかゝるゆふくれのそら

島雪

明石かた汐かせさえて初みゆき波間にふれり淡路しまやま

十一月廿一日。井手今滋か農商務省一等屬に拜せしよしきゝて。

名にしあふ井手の玉川玉よりもかゝやく光いまよりや見ん

けさきけはうれしく君か位山のほるみちにもいてにけるかな

同人の送別に

立よりし蔭なつかしきたち花の香は年ふともわすれさらまし

明治歌草七〔明治十六年稿〕

四海清 御題

四方の海の波ものとかにみゆる哉八洲にあまる御代のひかりに

水上の御もすそ川の清けれはよもの海にはたつ波もなし

新年を

あたらしくたつと思ひし年波はやかても去年のかへるなりけり

去年十一月中ころなりけむ。かた岡すむ子の許より。文のはしに『いなは山松のこのまやいかならむ庭のもみちも今ちしほなり』といひおこせけれは。返しに紅葉のちりたるを紙につゝみて。

かくこそは散はてにけれいなは山まつほと過てきみかとはねは

かへし心さしふかさしられて紅葉は山に見るよりめつらしきかな

井手今滋かみちのくに出たつとき。よみておくりける。

君か行かたにありてふ白川のしらすいつれの日をかちきらむ

行末をかけて思へは君に又あふくまかはそはるけかりける

清女捲簾

玉たれのをすのとやまの白雪に名をさへたかくかゝけつるかな

むつさのはしめつかた。人々つとへて。琴なとひかせけるに。其日しも子日なれは。

子日せし野への小松にけふは又ことの音をさへひきそへてけり

山家鶯 家の會はしめに當座

うくひすの來てはまつ啼谷陰にうれしくいほをむすびてけるかな

山家春

くるとあくと花に起ふす山里のはるの心を誰にかたらむ

鍵谷龍男か東京に行く餞別に

歸らむは今とはいへといなは山松ほとといかにひさしからまし

桂園翁の四十年祭に。對花憶昔といふことを。

忘れては今を昔とたとるかなその世なからの花の木かけに

大井川昔の花のおもかけもかへらぬ水にうかふけふかな

大井川入江の松に雪とふる花はむかしにかはらさりけり

同會に當座。江松老

大井川入江の松は老にけりいく世へぬらん水のみなかみ

同時。世路如夢

ありてなき此世は夢か夢ならはむかしの人も見ゆへき物を

雨中新樹

立よれはみとりしたゝるこゝちして青葉涼しき夏木立かな

菜花

色をこそそれとも見しか菜の花の其實はやかてこかねなりけり

菖蒲露

あやしくも露こそかをれ山かつか何のあやめもしらぬ軒端に

待時鳥

月のよをまたせ〳〵てむら雨のふる日もなかぬほとゝきすかな

時鳥遍

夏山の青葉のおくのほとゝきす聲さへしけくなれるころかな

夏　月

夕たちの露またおつる楢よりぬれてもりくる月のすゝしさ

夏なから涼くもあるかてるつきの光や秋にまつかよふらむ

夕　立

いさり舟さわくを見れはあしや潟沖ゆく雲や夕立のあめ

山夕立

かきくもりふるかと見れは鈴鹿山よそに成行夕たちの雨

水邊螢

はる〳〵と野川の水のゆくへまてくるれは見えてとふほたるかな

旅泊夢

志ら浪のよな〳〵かはる浮寐にもおなし都を夢にこそ見れ

新　竹

夏くれは陰さしそひてわか竹のよな〳〵涼し葉かくれの宿

七月のはしめに。上田悉徳か大藏省よりめされて。京へのほるをおくりて。

思ふことなりて出たつ旅路には心すゝしき風や吹らむ

鶯の花の都にうつるともふるすの谷はわすれさるらん

遠江國中泉郷八幡社。縣社にすゝめられけるにつきて。奉納の歌よみてよと。其郷人大隅重光にこはれて。寄泉祝といふとを。

玉垣の光りをそへて岩清水けふよりちよのかけもみゆらん

海邊月

たゝへくるうしほに影の先見えて波より出る月のさやけさ

わたつみの波よゝり出し月影は今こそそのほれいそ松のうへに

九月廿三日。新室にうつる。從容亭といへは。庭にふるき松あり

蔭しめて結へる庵は我やぬし松やあるしとえこそ定めね

田家雁

にひなへの時來にけりとわか門のむろの早わせかりそ啼なる

田家月

夕けたくけふりはたえてをちかたのわらやの上に月そのほれる

離菊

影はかりうつると思ひし菊の花むすへはかをる谷の下水

暁鹿

小くら山暁つく夜ほのかにてそこともしらす鹿のなくなる

霧中雁

秋風に薄きりまよふ朝ほらけたえてはつゝく雁の一つら

故井手曙覧の十年祭に。其子今滋のもとより。掎衣處々といふ事をよめといひおこせけれは。

月清みよそのきぬたにさそはれて我うつ音を人も聞らむ

秋の末つかた。井手今滋か岐阜に來て。二三日ありて。東京へ歸るを送りて。豊島夏海の

もとに宴しけるに。菊によせて送別のこゝろを人々よみけるに。

君が爲をりて送れはしら菊の花むけとこそいふへかりけれ

落葉有聲

静なるねさめなりけり闇の上におつる木の葉のおとはかりして

朝霜

夜もすから吹つくしたる木枯のあとまつかなるけさの霜かな

山家烟

朝夕に立のほりつゝ山すみの心に似ぬはけふりなりけり

世中の風になひかぬ山住のこゝろも見えてたつけむりかな

初冬時雨 家の合に

紅葉見にきのふは分し秋篠の山路時雨て冬はきにけり

田中道麿大人の百年祭に。時雨といふことを。 名古屋なる關戸内兄のもとめによりて。

めくりきて今年もけふはまくるらむきえし昔の空のうき雲

氷初結

けさみれは夜半の時雨の庭たつみ落葉なからに氷ねにけり

名所雪

雲うつむをきその山路たえぬへしきのふもけふも雪はふれゝは

三輪の山尋ねて行かむ道もなし雪のいつこか杉立るかと

片川のちよのふる道あと絶てみ雪つもれりさかの山もと

すみかま

すきはひの心ほそさを一條のけふりに見する小野の炭やき

日にそひてきえ行く空に雪はふりけふりはのほる小野の炭かま

雪中早梅

雪の中に咲て春まつかくれ家の梅の心そわか心なる

初雪のふりけるあした

ふり初しけさたに人のとひこねは雪を友にてけふや暮さむ

明治詠草八〔明治十七年稿〕

晴天鶴　御題

朝日かけ匂へる空をとふ鶴のちよの影こそくもらさりけれ

海邊鶴

あを海原みゆる限りは島もなしいつこをさしてたつの飛らむ

山家迎年といふ事を　家の會始に

ことさらに立たるならぬみ山へのかとの松にも年立にけり

世を海は遠くのかれし山里も立つとし波はへたてさりけり

初春鶴

百千鳥おのがさへつりやめてきけ春たつけさの鶴の一聲

年の始に東京なる高崎正風ぬしかもとより『いかはかりのとけかるらんよの事にかゝ

わらさるの年を迎へて』といへるに。かへし。

ほきとも忘りけりな世の人にましはらさるの年をむかへて

紫竹久友

早くよりなれにし友はあまたあれと此君はかり久きはなし

そのかみは馬に作りし園の竹杖にきるまて我世へにけり

新柳靡風

さし捨し垣ねの柳春風に吹よるはかりいつなりにけん

摘若菜

消のこるこその雪間をかき分てつむはことしのわか菜なりけり

北山のたかねの雪はきえねとも八瀬の里人わかなつむなり

春の野をよめる

妹と出てきのふか摘し春の野のなつなのくきもたちにけるかな

三木なにかしか七十の賀に

たけくまの松の二木の千代もあれと三木の榮そかきりしられぬ

珠のやのあるし春彦か六十の賀に

年をへて君かあさりし和歌のうらの玉を千とせの有かすにせよ

末松山

とし月にひらくる御世をまつ山のちよの末こそゆかしかりけれ

梅をみて

年の内はさきつとたにもいふ人のなかりし物を梅のはつ花

故郷梅　西山謙之助追遠會

袖ふれし人こそ見えねふる郷の梅は昔のかに匂ひけり

梅間鶯

うくひすの來鳴垣ほの梅かかは聲のにほひの心地こそすれ

春川

降つみし雪の白川打とけてまさる汀に春風そふく

雪のをり〳〵降けるころ

いつまても寒きとし哉朝戸明てけふも雪かといはぬ日そなき

春月

ほの見ゆる人かけゆかしほそ殿の内まて霞む朧月夜に

山月照雲

明てこそそれかとも見め箱根山月にまかへる峯の白雲

春草といふ事を　故近藤芳樹翁年祭に

春雨のふる根にめくむ初草のうらなつかしき昔なりけり

むかしにも春の歸らはもえ出る草葉をみてもなくさみてまし

告天子入雲　三月九日家の會に

蝶鳥のむれをはなれて久かたの雲ゐにひとり啼ひはり哉

春草短　同日當座

春日さす垣ねの雪のかたへより消れは崩る庭のわか草

春も猶雪のふる根の古よもき下にもゆれとしる人もなし

けさみれはみとりになりぬ春雨のしめりや草の種となりけん

寄鳥戀

御狩野におはるゝ鳥の草かくれ命かけたる戀もするかな

春月憶昔　竹内享誌年祭雜題

へたちゆく昔の影の戀しきにかすみなはてそ春夜の月

夕花　四月十三日家會當座

あまりにも靜まりはてし夕暮の花の木するゐに鐘ひゞくはや

暮ぬへき空とも見えすうら〳〵と夕日に匂ふ山さくら花

尾張國清洲なる楠田利眞か。其友なりし土器野新田伊藤權左衛門はしめ六人の人々の
爲に靈まつりすとて。懐舊といふ題を設けて。歌こひけれは。
國の爲おもへはをしき益荒男を世になき人となしてけるかな
世にあらはいかに嬉しと思ふらむ此大御代を君に見せはや
同をり。利眞におくりける。
おはし世に沈むとみえしかすか井の底の眞玉はあらはれにけり
近江國なる朝日の里の山部赤人社に奉納の歌人々のすゝめによりてよめる
花色春久
言の葉の光りも世々にくもりなくにほふ朝日の山さくらはな
武儀郡關の里なる有竹園のあるしか四十賀に。寄竹祝といふとを。
君かよはひまたわか竹のよそちより千代をこめてやいはひ初らん
郡山なる大野春彦は世々酒を造る家なるに。其酒の名を白雲と名つけて。それか歌よめ
とこへるに。
言の葉の深きなさけは今も世にくみてしらるゝ白雲の水
其所に白雲水といへる清水あり。こは東野州か名つけ初しとなんいひつたへたる。
朝霧 服部勝衛の家の人丸大人影前合題

明石かたとほき昔の秋立もおもかけにたつけさの朝きり
澗底月 當座
たえ〳〵にこのまもりきて谷水のそこはかとなくやとる月かな
九月七日。服部勝衛か家にやとりて。
こはきさく岡へのさとに一夜寢て明しつる蟲の聲かな
其あくるあしたに
朝戸出の庭の苔路の露みれは秋にはなりぬみやまへの里
赤尾より高宮にいたる道に。鳥羽といふところあり。けふは道すから。あつさたへか
たきを。さすかにふく風のすゝしかりけれは。
白鳥のとは田のいなは打なひき堤吹こす秋の朝かせ
粟野なる桑原道衛か家に。勝衛とともに至りけるに。其家は里ちかけれと。前はやか
て田のもを見はるかして。心ゆくすまひなり。
垣ねまて稻葉のほ波吹よせて秋かせ涼しを山田のさと
勝衛の家を立いつとて
又もこむまかきかもとに蟲啼てこはき花さく岡のへのやと
物かたりして有けるほとに。十日あまり八日の月も出けれは。

秋風に夜はふけぬるしさしのぼる月もあか尾の山の下いほ

道衛か家の庭に白き萩の咲たるを見て

こぼるゝは花かあらぬかしら露にさなからまよふ庭の秋はき

鳥羽の堤にて太田倉雄に行あひて

立とまりしはしかたらへ里の名のとはにあひみむ物ならなくに

樓上賞月　九月廿一日家の會に

山松の梢見おろす高き屋に大そらちかき月を見るかな

山家鹿　おなし日當座

馴々てきけはこそあれ柴の庵にあまりに近き鹿の聲かな

尾張國清州なる河村清綏か茶室に。庵といふ額をかゝけて。其かにのいほといふ五文字を。句のかしらにおきて。茶室の心をよめとこはれて。

かり初の庵の竹垣軒の松いともものすきのほとも見えつゝ

かゝる世のにこりを清くのかれては命をのふるほかやなからむ

かけしけき庭のくれ竹軒の松いく代へぬらんほともしられす

かへしつゝ庭のくれ竹軒の松いつも見まくのほしきやとかな

香川景恒二十年祭に。落葉といふとをよませけれは。　會主良信尼

言の葉の道ふみわけし跡もなし紅葉ちりしく岡崎の里

湖邊落葉　十一月二日家會

梢みな誘ひつくしてつくふしま浪の紅葉を吹あらし哉

山路秋行　當座

折りかさす紅葉にたけを取そへていろも香もあるけふの山つと

人の聲狩に行きしと聞きて

むら時雨ふり出てこし君まちて笠たてつらむあはれ秋の香

對鶴爭齡

あしたつに乘むまてこそ難からめ千世の友には我も成なむ

井手今滋か久くおともせぬに。こそ秋菊のさかりに。こゝに來て。人々と共にかたらひしことなと思ひ出て。

もろともに折てかさしゝ白菊の花はことしも咲にけるかな

又もすき秋さへくれて菊の花移ふまても問はぬ君哉

又かのあたり思ひやりては

君をのみ心にかけて陸奥のしのふの山はわか身なりけり

霜早き外のはま風さえ〳〵て言の葉草もかれやしぬらむ

雪夜讀書　十二月十四日家の月次

ふりし世の跡を尋ねて窓の内に書よむ雪の夜は更にけり

井手今滋より文の中に『都へはいつ歸るとも白川の關のこなたにみとせへにけり』といひおこせるかへしに

契りおきし君は歸らて年波のこゆるもつらし白川の關

今滋のもとへ

とふの浦に立らむ波の音つれを吹きも傳へよ外の濱風

藤井眞淼のもとめによりて。寄川祝。

龜山の松もうつれる大ゐ川千世よろつ世の影を見る哉

太田より歸る道にて。時雨にあひて。

一時雨ふくれしくもの絕間よりぬれたる袖にやとる月哉

年の暮につ東京なる高崎正風のもとへ。鮎のかす漬にしたるをおくるとて。

鵜の嘴にかけし長良の押鮎はまた風流男に口やすはれん

正風かへしおし鮎の口すひものになから川ふかきこゝろの見えもするかな

冬　月

あさ葉野のかれふの薄霜さえてほのかに照らす冬夜の月

雪中早梅　御題

春をまつ心もしらす降雪のねたさを梅の香にもらすらむ

ふりかくす雪のねたさに梅の花をしき枝をも折てけるかな

鏡餅を

新しき年をもちひの鏡にもうつすはふるきためしなりけり

一月一日の日。玉箒をとりて。

ふるとしの塵かき拂ひ手にとれは玉の緒ゆらくたま箒かな

松盤樓のにひむろほきのかへり

ときはなる松の名におふ新室はことしやちよのはしめなるらん

四方拜　家の合始に

久かたの星をとなふる雲ゐより光りのとけき年やたつらん

松

小津の崎千世の昔を人ならは問ましものをあはれそ松

谷陰にふしたる龍の鱗かとみゆるは松の老木なりけり

新年竹といふことを　尾張の清洲なる竹田良正か家の舎はしめに

くれ竹の一夜をとしのへたてにてけさより千代のいろやそふらん

新年興　同し里の清流吟社の題

年たてはこゝろひかれぬものそなき子日の小まつ庭ののり弓

踏歌節會

ほの〳〵と明行く空に雪ちりて竹川うたふ節のさやけさ

新年雪

冬深くふりにし雪をあら玉の年の光にみかくけさ哉

榊とる神かき山に年たちてふる白雪をゆふとこそみれ

朝雪

天のとのひらけ初けむこゝちして雪おもしろきけさの空かな

澤餘寒　二月八日家の會に

はるもまた淺澤水のうす氷底なる魚やひまもとむらむ

曙霞　同く當座

夜を殘すかすみのおくに鳴つれて遠山からすこゑそあけゆく

春里　同

さかの山花見歸りの道くさにすみれつむなりうつまさの里

不二をよめる歌の中に

日のもとの高き心を久かたの空に見せたるふしのしは山

いく藥ありといへはやふしのねは山のすかたも花せさるらむ

野呂嵩次郎か父の賀に。寄川祝を。

なかれても盡ぬ齡を木曾路川君にとよするせゝの白浪

もとの熱田の大宮司千秋季福か十七年の靈まつりすとて。寄花懷舊といへることを人の

よませけれは。

かさしけむ昔の人はなき世ともむらてや庭の花は咲らむ

雨後花　室生とよ子の父の十七年祭の當座

はる雨のはれてうれしき心よりふみほころひし山さくらはな

寄花懷舊　全上

まとゐしてなき人しのふこの本にむかしのはるの花の香そする

野遊

思ふとち心をはるのひわり子にさゝえとりそへいてし野へ哉

淺野良重かうまれ年のなゝつめなれはとて。ひつしといふことをよませけるに。

ふさやかにおひしひつしの上毛なすゆたけく長き齢へなゝむ

二月廿日の日。高崎正風の永田町の家に火ありきときゝて。いたくおとろきしを。なほよく聞たゝしけれは。そは前栽にありしをのことものゝ。いさゝかなるあやまちせしを。はやくけしとめたるなりけりときゝしかは。よろこひていひやりける。

みそのふにもえしは春の小くさにてけふるとみしや柳なりけむ

霞中鶯　三月の家の會に

大ゐ川かすみの底をこきくれは入江の松にうくひすの啼

閑居

とりふける小さゝのやねも杉の戸もあるにまかせし庵とをしれ

曙鶯

小くら山かすみはてたるあけほのに花のあたりは鶯のなく

出雲國造千家尊福ぬしの母刀自の六十一の賀に。鶴契千年といふことを。

君ませは出雲の浦のいつも〳〵あしへのたつもちよの聲する

今ひとつは寄藤祝

ちよまてもわかむらさきの藤の花かつらにしつゝをとめさひせよ

大矢田の紅葉のうたこひけるによみてやりける

姫神のつまこひわひし思ひよりこかれそめけむ谷のもみち葉

紅のいもかもやまのもみちはゝ引らんすそのこゝちこそすれ

閑中鶯

とふ人のありとはなしに草のとを明てきゝつるうくひすのこゑ

伏島頼之のなき母の墓にまうてゝ。『なき人の跡とふ野へに鳴蟲のこゑもかなしき古郷の空』とよみけるよしいひけるに。

跡とひし君かこゝろの悲しさを聲にたてゝや蟲も鳴けん

清洲なる竹田晨正か家の會に。野霞。

清洲川末こそ見えぬ春の日のかすかねの野は霞こめつゝ

志の田よしをか東京にありて。上野あたりの花此ころさかりなるよしいひおこせけるに。

きゝしより心も空になりにけり雲の上野の花のたよりを

鶴のひなつれたるかたに

あしたつのおのか齢のあるか上に千世もとひなを思ふなるへし

待時鳥　家の會に

夢にたに聞まし物を時鳥寐もせて一夜まち明しけり

夏獣

み山路を板子脊おひておりのぼる牛のあへきもあつきころ哉

雨中郭公

さみたれの雨にみたれて立花の花ちる里に啼ほとゝきす

富永蓬山か家の會に。わかたけを。

いつしかとなひく姿に若竹の世こゝろはやく見えにける哉

海邊螢　家の會當座

なにはかた波に亂れてよるひかる玉もの花はほたるなりけり

浪速かた磯のかりこも朽ぬらんみたれ初てもとふ螢哉

夜水鷄

くひな鳴門田の澤のうきぬなわくる人あれや叩く聲する

蔭しけきことしの竹の長き日もくれてすゝしく水鷄なくなり

栢淵靜夫か玉つしまへ行ける日記みせけるに。かへすとてそへたる。

言のはをみるにつけてももろともにゆかぬさかひのうらみこそそへ

わかの浦に拾ひし玉にくらふれは吉野の花は色なかりけり

寄書戀

思ひやれ春の山田にたつ牛のふみかくにさへぬるゝたもとを

桑原道衛か七十になりけるいはひことに。巖によする祝といふことを。

七十路はまたさゝれ石なからへていはほとならんほとをまたなむ

入坂祭　家の月並に

ねりいたす入坂をとめの花見んと人も山なす神祭りかな

やまをひくつなての永き夏日もあかてやけふはねりわたすらむ

遠夕立　同く

打わたすふもとは晴て夕立の雲の浪こす末のなつ山

寄琴戀　當座

あたなりしわか中の緒のしよりうき琴のねに泣かぬ日はなし

行路夏草　同

ましはかるかたもしられす成にけり夏草たかきをのゝ山みち

故郷萩　家の月並題

ふる郷につゝりのころも立かへりきてこそ見たれ萩の錦を

早秋蟲　當座

わかやとの淺茅かうら葉露見えて秋をしらする蟲の音そする

秋來ぬとをきの葉そよく風のおとにかきねの蟲もおくれさりけり

西田保明か十年祭によみて手向ける

あり明に光かくれしいにしへの秋うらめしき月のかけかな

夕紅葉　家の月並當座

むら時雨はれ行あとの夕霧に入日をうけて匂ふもみち葉

夕つく日さしも匂へるもみちはもくれなはよるのにしきならまし

庭菊

これをのみ老せぬ友と年ことにかさすも久し庭の白きく

初冬時雨

秋風をきのふかわひしふかくさの鶉の床にしくれふるなり

大井川ゐせきを冬やこめつらんかへらぬ波にしくれふるなり

夢　野村秋足家の月並

五十年の花のさかえもさめぬれはいひかしく間の夢にこそあれ

現にはかけてもよはぬ雲井にもわたせは渡るゆめの浮はし

野時雨　同上

遠かたは夕日こかれて茜さす紫野へを行しくれかな

浦千鳥

むかしをやなれもこふらんまほ瀧のうらさひしけに千鳥鳴なり

おくれ

神無月空さためなくまくるゝや浮たる雲の心なるらむ

神淵村なる上野なにかしか五十賀に。寄松祝といふことを。

ときはなる八重坂山の松の色にまるくも見ゆる君か千よかな

これは神ふちにある山の名をよめり

かきりなき君をゐしらて住江の松のみちょと思ひけるかな

東京なる渡邊昇か父の八十賀に。松竹梅を題にて。心にまかせてよみてよとありけれは。

うこきなきいはねの小松いはねともしるきは君かよはひなりけり

ちよまての君かかさしと梅の花年もかきらす咲にほふらん

子は親におひまさりゆくわか竹の千世の末をも君そ見るへき

泳宮の薔薇見に。鳥居すかねをともなひて。十月のつこもりかたまかりて。道すからよみすてける歌とも。

賤のをかおもけに稲を荷へるや年あるる秋にあふこなるらむ

打わたす山田につゝく淺ち原いなくさかけて色つきにけり

明治街道とてちかころひらけたる道

ひとすちに直くひらけて往かよふ道さへ安き君かみよかな

久ゝ利の谷川にさし出たる巌あり。其うへにいとおもしろき松だてり。

山をぬくたちからもかな松なからいはほ引よちさゝけこましを

山中いと物さひし

谷あひの棚田は早くあれぬらんすゝきほにいでゝ秋風そふく

くゝりの池はうつもれて。跡もさだかならす。かたへに大きなる樹あり。

千世をへし老木のむくの見ゆるかなこやいにしへの池へなるらん

おはらめかいたゝく柴に。雪いさゝかかゝれるかた。

山路にてふりけん雪をおはらめかいたゝく柴の上に見るかな

鉢たゝきのかた

なにとなくたゝくひさこも青竹の一節ありてをかしかりけり

冬　鳥　藤井眞澄か家の月次十二月の題

大井川山かけさむき朝かせに入江の洲鳥立そらそなき

孤島雪　兼題

沖津風さえにけらしな浪まより見ゆる小島にふれる白雪

冬　旅　當座

たひ衣きのふの時雨けふの雪ぬれぬ日もなき東路の空

ふみわけて行らむかたもしらすけのまのゝはら原雪はふりつゝ

なにはかた旅ゆき暮て冬の日のみしかきあしのかりねをやせむ

筏　當座

筏師はまきのつまてをまくらにていく夜浪まにうき寐しぬらむ

そま木引木曾のみやまの深けれはくたす桴のたゆる日もなし

たにはちはさえにけらしな大井川下すいかたに雪のかゝれる

一月一日養老山下なる柏淵靜夫かもとへ

老らくもわかゆてふ水を若水にけふやむすはむたとの山人

同日。高須なる吉田利和のもとへ

けふははや年もかへりぬ諸共に花見し春はきのふと思ふに

綠竹年久　御題

あをひえのなりけむ竹のいく世へて今もかはらぬ綠なるらむ

子日松　一月十日家の會始に

おとゝひの心ちこそすれ乙女子かひくや子日の野へのひめ松

新年宴　同く當座

くもの上の豊のうたけに酔にけりとし立とはこれそうれしき

春夕月　一月十日家の會始に探題

山のはに暮殘りたる花の色いやかても月のにほひなりけり

月いはやくれあへぬ空に出にけりあまりに永き春の日なれは

海邊霞　二月十四日家の會兼題

浪の上は朝風なきて青たゝみ敷津の浦にかすみたなひく

氷駐船　同

あつ氷むすひとめたるつな手繩いつ打とけて船出してまし

龍　柏ふち醉夫か家の會に

雲をよひ雨をふらして時の間におこりたつこそあやしかりけれ

榊　同

霜おけとかれせぬいろもある物を香さへかくはしもりの眞榊

竹　同

雪にふし風になひきてあらそはぬ竹こそちよはへぬへかりけれ

子日松

君か爲ひける子日の松なれは二葉なからや千世はきるらむ

松有歡聲

ときつ風きつかなる世のたのしさを松はこゑにもたてにけるかな

風前柳

春雨の晴なんとする朝風にちる露清し青柳の絲

故郷梅

あるしさへ忘れて年をふる郷にひとり春しる梅かゝそする

思ひ出て見にこさりせは故里にひとりや梅の咲てちらまし

竹か鼻なる井上なにかしか家の會に。山を。

いつとなくうちむかひても都よりみゆる山みななつかしき哉

湊春雨

けふも又かすみの衣きほたれて袖の湊にはるさめそふる

寄梅懷舊

とひこよといひけん人はなき世ともきらてや梅のかに匂ふらむ

萍始生

青柳の影にましりてもえ出し池のみくさそなひきそめたる

松殘雪

春霞たな引までも殘りけり小松かはらのはるのあわ雪

粟田山かすみのまより見ゆる哉雪またきえぬみねの松はら

かへるかり

さく花に心とめぬを心にてかへるやかりの心なるらむ

歸雁幽

あたら夜の餘波を空にかすませておぼつかなくも歸る雁哉

柳上鶯

鶯の木つたひなけは青柳のいとの聲する心地こそすれ

寄橘祝　遠江國人大場重光七十賀

たちはなは花さへ葉さへ植て見るきみかみさへやとこはなるらむ

故郷梅

葎ゐひいたち笛ふくふるさとの庭ともいはす梅かをるなり

あれはてゝ人もすさめぬ故郷にあやしやうめの匂ひまされる

香をとめて問ふ人もなき故郷に心やすくやうめの咲らむ

華陽學校の竹田安之助か愛媛縣へゆくをおくりて

いつかまためくりあふへき穴にやしえひめ縣に君かゆきなは

へたつともふみたに通へかなふみのもしの關路はさはりしもせし

三月十九日。雨はれたるをまちて。さゝか谷の梅見にまかりて。

咲そむる梅にむつれて鶯もさゝ鳴すなり笹の谷ふし

來て見れは盛はすきぬ梅はやしはやしと聞てたゆたひしまに

花下歩月

行まゝに花の木かけはかはれともおなし木末に月は見えけり

さやかなる花には道もまよはしを月さへおくる志賀の山越

海邊花

須磨の浦のあまの磯屋にさく花のはるの見る目はわれそからまし

若竹

ことし生のいさゝむら竹いさゝかもまたうき節いまらしとそ思ふ

殘春

花いちり人は歸りて山里にのこるは春とわれとなりけり

ある人の追悼會に。苔上落花。

跡とひて塵かきはらふ苔の上にけふの手向とちる櫻哉

出雲國松江なる村上正雄か六十一の賀に。寄琴祝といふを。

神世よりまらへ絶せぬつまことを千世のためしにけふやひかまし

かこしま人服部照邦か七十の賀に。巖によする祝といふことを。

うこきなき齢を君にさゝけむと龜も巖をのせてきつらむ

鈴木乾堂と長良川に船をうかへて

暮はてゝ水はさやかに見えねとも石間にたきつ音の涼しさ

なから川なかれも清きせをとめて蛙なくなりくるゝ夜ことに

行水に移るを見れはかゝり火のなかるゝ影もすゝしかりけり

長良河うかひ見はてゝ歸るさの衣手すゝし夜や更ぬらむ

大野春彦か父の五十年祭に。短夜夢を。

ゆめちには遠き昔も見つるかなぬるほともなき夏の夜なれは

海邊鶴

住江のおまへの濱に打よせてかへらぬ浪やたつのむらとり

九月十四日。庭の萩を折て。夏海のもとにおくるとて。

君か爲むくらの庭の朝露にぬれてそ折し秋はきの花

紅葉淺といふことを 九月二十四日家の月並合

まくれてもまた色淺き潮紅葉に心をのみや染てましと

柿 當座

山柿の枝もたわゝに、なれる實は紅葉のほかの秋の一しほ

庭上菊 同上

うゑすてゝ心のまゝに咲かせはやつくれる菊の花いうるさし

松をよめる

起たるもまたふしたるもみゆる哉床の山への松のむら立

大矢田の里なる眞澄が其山のつくはねの歌よめといふに

紅葉見て歸る山路にをとめ子かめにつくはねやけふの家つと

みのゝ國關の里なる塚原なにかし七十の賀に。往事如夢といふことを。

うきふしもうれしきふしもくれ竹のよは夢なれやさめて思へは

七十は一夜のゆめと思ふらむへぬへき千世の限りなけれは

竹か鼻なる千尋蔭社の月並題。曉時雨を。

なかきよも今いとしらむ山のはの月をかきくらしふるむくれかな

爲蛙吟社の會に。菊交薄。

花すゝきほにいでゝまねく野へみれは草のたもとに匂ふ白きく

故鹽谷則滿が十年祭に。祉頭燈といふことを。

瑞かきの光となりて殘りけり君かかゝげし神のともし火

名所松　同當座に

いなは山これやちとせの蔭ならむあふくも高き嶺の松原

旅泊

浪の上にをしのふすまをかさねても朝つま小舟夢むすふらむ

遠山雪　十二月十二日家の會當座

大そらのみとりの末に白雪のみゆるや木曾の御嶽なるらむ

難波女かあし火たく屋も下たえて初雪ふれりむこの遠山

ゆきのうた

埋火に酒あたゝめて夕くれの雪はまとより見るへかりけり

年の始によめる

〔明治二十年稿〕

年ことにまさる頭のしらゆきはやかて齡のつもるなりけり

けふあすと待こし年も立にけり春にはいつかならむとすらむ

高崎正風ぬしのもとに

竹にすむ雀もちよとことほきて聞えそあくる鶴の御園に

井手今滋か東京に歸りたりと聞て

降つもる雪のまら川跡にして花の都にうつりきや君

池水浪靜　御題

おほ澤のみきはの浪そかすむなる池の心も春やきるらむ

一月九日。家の月次會の會始にて。人々つとひけるに。雪中鶴を。

わか浦の蘆邊も見えすふる雪に波の上遠くたつ鳴わたる

天とふやつはさも見えすふる雪にたつかね白し淡路島山

梅未開　同日當座に

朝な〳〵つほみかそへて梅の花咲をまつまもいく日へぬらん

清洲驛なる竹田晨正か家の會に。新年柳。

あたらしきことしの花を青柳のいとゝくけさは見せてける哉

ある所にて女の兒ともか琴のひきそめといふことせしに

をとめ子は松よりさきにひき初しけふのはつねはことさらにこそ

梅

折つるは一えなれともうめの花匂ひは袖にあまりぬるかな

早蕨

山里の花の便りもうれしきにそへておくれる峯のさわらひ

雪中鶴

晴わたる雪のあしたに聲はかりまつあらはれてたつ鳴わたる

西京なる土岐久則か十年の忌に。其子北脇卓哉か歸雁幽といふ題にて歌よませけるに。

はかなしや數かく文字の跡もなく霞に消て歸るかりかね

こゝろうき別を人に見せしとや霞に消て雁の行らむ

二月のなかは。難波へ行ける時。京にてよめる。

やよやまて薪うる子にことゝはむ大原やまの花はいかにそ

ほり川の川邊の柳めもはるにかすむ大路をくるま引ゆく

祇園の柳の眉根花のかほ見るより春になりにけるかな

さくのさせわたの歌よめと人のいひけれは

唉しより菊に心をつくしわたさせてちとせの秋をまたまし

岩代國の三浦成人といふ人より。寄桃祝を題にて歌よめといひおこせけれは。

三千とせになると聞こそはるかなれもゝといふ世も久しとおもふに

中島の郡中村へ行ける道にて

生ふけるわかはのひまにかつ見えて椿花ちる里のなかみち

多跡山におつる夕日の影晴て堀津の麥生風渡るなり

望遠帆

はる〳〵と八重の汐路の夕日影かたほにうけて船かへる見ゆ

路卯花

うの花の雪にも跡の見ゆるかな道ゆき人やをりあらしけん

早苗 藤井氏澄か家の會に

桑の樹のひまより見れは島方の畑あひの小田に早苗とるなり

わか門のおや田の苗はふしたちぬわか子うま子もいてゝはやとれ

賤のをか背面の麥田かり入てかへすやかてもとる早苗かな

山家 同く

谷ふかく去けれる松の陰ふめてすめる翁やこれの山もり

目に見ゆるかきりをおのか垣内にてあならやまし山にすむ人

夏夕月　同く當座

ならの葉のかへるひまより夕月の影もにほひてかせそもりくる

くひな　是も

あふちちる森の梢に夕月のかけ見えそめてくひななくなり

夜もすから月よりほかにさゝぬ戸をさのみくひなの何叩くらむ

夜郭公

ほと〳〵すなく一こゑのさやけさにやみの空をもなかめつるかな

稻妻

小笹原風まつ露のそのまにもきえてはかなき宵の稻つま

八月の末つかた。東京なる伊東祐命愛知より來て。鹽谷の家にて人〳〵とまとゐせしとき。

當座に山家萩といふことを。

みやこ人來て見さりせは山里のまはきはよるの錦ならまし

同人愛知へ歸りて後。九月五日といふに。東京へ出立なんとする送別會に秋鳥を。

かしの實のこほろ〳〵庭の朝風に梢はなれてこからとふなり

小鮒すむ秋の野澤の水かれて鷺のあさりの時えかほなる

露底蟲　吉田利和か父の三十三年忌の追悼會に

おきあかす露にみたれて鳴蟲の聲さへ庭にあまるよはかな

淺茅原露吹むすふ秋風にみたれても鳴蟲のこゑかな

管絃を　同時

今も世に聞えけるかないと竹の志らへは家の風にまかせて

この父は音曲の道に志あつき人なりしとそ全の利和もまたよく此道をつけり

閑居秋夕　賀島重遠なと〳〵打よりて眠よみたる時

かなしともうしともいはんかたそなきひとりあるやとの秋の夕暮

そほつ　伊奈神社獻詠月次題の内

山田もるそほつの小かさ露もりてみの寒けにもみゆる夜はかな

すたれたる弓矢たはさむかゝしには鳥おとろかぬ今のみよかな

村山松根か七年祭に。曉夢。

往とみし夢の名殘もかきくれてなみたしくるゝ曉の空

七年の昔のゆめを曉のかねひとこゑにさましつるかな

賀島重遠かとほつ祖の三百年祭に。松をよめる。

いなは山松も二葉のむかしより君か爲とやさけりそめけん

老一人

おいか身にこゝらよりにし年波のおもはいおもてにあらはれにけり

名所山

かまと山何のなけきをこりつみてさのみ思ひにもえわたるらむ

竹近聞霰　湯須社中月並

窓おほふ竹をあられのうつ夜半は衾のしたに夢そくだくる

冬　鳥

霜おろきすゝきに立るかさゝきのみの毛寒けに川風そふく

冬　雨

ふりつるは木の葉はかりとおもひしをおくれにけらし庭のおめれる

むかしあへる人

見し人かそれかあらぬか面かけはかはらすなから年の老ぬる

十二月十四日家の會に。冬神祇。

宮人か小忌の衣に雪ちりておろきにかへす山あゐの袖

冬雨竹　かは家雜題

そひてふるこの葉やふかくつもるらむ夜ふけて雨のおとのかはれる

ふりつるはこの葉はかりと思ひしをおくれにけらし庭のおめれる

歲暮雪　同く當座

としくるゝいとなみしけき行かひに大路の雪はつもるまもなし

くれてゆくとしのいそきのなかりせは雪にこもりてけふはあらまし

かきくらしけふふる雪は行としをしむ心のつもるなりけり

江松老たり

大堰川いくとし波かよせつらん入江のまつの老にけるはや

雪埋松

ふる雪にみさをは見ゆる松かえをうつもれたりとおもひけるかな

〔明治二十一年稿〕

歌子を送りて

立かへりこむとはきけといなは山まつほといかに久しからまし

とくゆきてはやも來ませと取すかり君かみ袖をぬらしつるかな

撫　子

これもまたあはれ親なし片岡の露にふしたるなてしこの花

若　水　一月八日家の發合

みとり子にかへることしの若水をやかても千世のうふ水にせむ

一月十日。高崎正風ぬしをおくりて。愛知にまかりけるに。わかるゝ時。

とゝめかねつひにこゝまてしたひ來て別れかたくも成にける哉

雪中梅　一月十五日伊奈波神社寄納合

一枝ゝまひてもをらむ梅の花降かくしたる雪のねたさに

雪中友　同く十七日當水みくらか家の合

ふみわけてとひこし友のうれしきは雪よりふかきこゝろなりけり

雪

むら時雨ふる郷寒き夕暮に青根か峯そ白くなりゆく

西京なる三上智勝尼の八十賀に。梅盛久といふことを。孫なる三上明啓かよませけるに。

ちることもわすれて梅や匂ふらむ君か盛のはるにあひつゝ

紀朝臣のかたに

昔より汲人たえてなかりけりきの川水のふかき心を

尾張の桃青吟社の課題に物名十二題を

きたのうみち　一月

蔵北のうみちは浪にさわくなる野坂の浦に舟やよせまし

ちるとを何かをしまん惜みても　二月

ちりべし　三月

堀江こくあし分小舟水をあさみちりべしそきにそそきのみして

いしかり　四月

鳴わたる磐ゐわかれて聞ゆなりこや年老し雁にはあるらん

てしほ　五月

わか船は今こそこかめ磯山に月はのぼりてしほはたゝへぬ

きたみ　六月

立のぼるけふりもしけきたみの戸に賑はふ里のほとそしらるゝ

いふり　七月

さみたれにいふりふすふるかやり火の打しめりても夜は更にけり

ひたか　八月

秋風に垣根の竹のなるゐとを引板かと聞て鹿やゐとろく

とかち　九月

天の川とほき渡りのはるけきをいかにせんとかちきり初けん

くしろ　十月

久かたの雲より上にいちしるくきろきやふしの高峯なるらん

ねもろ　十一月

月くらくあたし吹夜の草の露目にこそ見えねもろくちるらん

ちしま　十二月

けさみれは庭の苔路にましりけりあらしにおちしまつのこほれ葉

四月廿二日。西京邦光社の會に。都花。

大きみの都のはるをきて見れは野山の花は色なかりけり

小くるまのちりも立ちてや霞むらん都大路は花くもりせり

酒

花にゑひ月にうかるゝ折〳〵のなさけは人のいのちなりけり

五月の末つかた。藤井貞澄の近島の家を音つれしに。門はさしていらへもなかりけれは。

むなしく歸りしか。其後このいへに人々つとひて。水鶏を題に歌よみけるついてに。

此宿はいつもくひなに耳なれてわかたゝくをもきかすやありけむ

八月はかり。養老にものしける道に。下かさ大あとなといふわたりを過けるに。此秋の水に

田面ひたりて。稻草みなかれつきたれは。さらに打かへして。ひえを蒔たりけるを見て。

今さらにひちかきたれてまくひえのたのみなけなる秋にも有かな

高田にて。かしふち靜夫の家にやとりけるに。その夜うなきのいと大きやかなるをやき

調してすゝめけれは。

めつらしくなつやせのはらふくらしつけふのあるしの心しらひに

又の日の朝。さゝけといふものをてうして出しけるにそへける。しつ夫『あたらしき畑

つものをと朝つゆにぬれてつみ來てさゝけつるかな』と有ける。かへし。

あさからぬ心は海におとらねは畑のさゝけもはたのひろもの

初秋月といふことをよめと靜夫のいひけれは

白露の玉しくやとの月見れいはしめて秋の光りなりけり

其家の清水のもとにひるいして

くみ〳〵しみつのもとに枕してまた一むすひむすふ夢哉

養老の菊水のほとりなる。素心庵の庭に水の吹あけをまうけたるか。いとすゝしけれ

は。立よりて。

すゝしさは瀧つ瀬のみと思ひしは此吹あけをきらぬなりけり

遠江國引佐郡井伊神社の五百年祭に。秋懷舊といふことを。

かくれにし昔のかけの戀しさにむかへはくもる秋のよのつき

秋かせの吹につけても忍ふ哉　消にし露の玉の行へを

井手今滋かなき父の廿年の追遠忌に。これも秋懐旧といふことを。

消にけん昔のあとをとふ秋の露やわすれぬかたみなるらむ

めくりこし月日はかりはそれなから別れし秋は遠さかりつゝ

香川景敏の一年祭。月下菊。

月てれはそらには稀になる星をまかきに見する白きくの花

暁　菊

有明の月をのこして明る夜のかきねに匂ふ志ら菊の花

十月十三日。米岡斯近か子の一年祭をものしけるに。あるし『撫子のかれて跡なき秋そさひしき』なと打吟して。去年を忍ひけるをあはれに覚えて。

こその秋消て跡なき撫子の露にことしもぬるゝ袖かな

同日。重陽にあたりけれは。夏海か家に人々つとひて。歌よみけるむしろにつらなりて。

後の月といふことをよめる。

ぬは玉の夜もいと永き長つきの今宵の月夜みれとあかぬかも

月下菊

さやかなる月の桂の露をうけて匂ふも清し白菊のはな

滝の川に紅葉を見る　十一月二十五日

滝の川ちるもみち葉をまくれにて水のみとりもいろつきにけり

上有知の里なる伊東霊誠寺頻念か七十賀に。寄竹祝といふことを。

おのつから空しき竹の心にはねかはぬ千世もたもつへらなり

いせの國松野瀬村榎定實か父の追悼に。落葉を。

けふといへは何の心もなくてちるこの葉を見ても悲しかりけり

暁　霜　十二月九日高崎氏にて當座

有明の月かけふみて行道に跡こそみゆれ霜やおくらむ

有栖川宮御邸へ參殿す　十二月十一日

あなかしこかしこき君か仰ことといきの限はいかてわすれむ

寄國祝

是やこの民を恵の大みのり立てうこかぬ國のみはしら

〔明治二十二年稿〕

在原業平朝臣

小野山の雪踏分しまこゝろの跡は千世まて殘りけるかな

武井芳矩か還暦の賀に。書による祝といふ題を。

床のへに君か朝夕かけてみる繪島の浪や千世の數なる

寳永の昔。小川景三か著せるはなひ草といふふみは。其ころの印本にて。今はいとまれなる物なり。この頃淺草の市に此書を得て。これを此まゝむなしくせんことのをしけれは。此道に志ふかき硃々翁にゆつるとて。

つたへこし世々の言葉の花ひ草つみはやし見よふかき色香を

柳絲映水　三月八日花雨吟社合集題

古池のまわたつ波に影見えて老木の柳眉つくりせり

筆寫人心　同當座

目に見えぬ人の心も見ゆる哉うつしゝ筆やかゝみなるらむ

野春風　三月十日大八洲學舍

はる霞空になひきて住よしのとほさとをのにはるかせそ吹

春雨のふりて晴たる山畑のすゝなかをりて朝風そふく

窗中眺望　前同

ひる見れとあかぬふしのねたこの蒲に旅行くらしよる見つる哉

ふしのねをそかひになして東路はかへり見しつゝいく日來ぬらん

あやしくもはしる車かけさ立し都をくものよそに見るまて

家の梅の咲けれは

世のちりにけかれぬのみを心にてやせたる梅は花咲にけり

わか宿は松あり梅もあるものをとはかりいひて待人はなし

家毎にうめのさかりになりぬれはわか此やとをとふ人もなし

春の日の光にうときわかやとにいかてか梅はさかりなるらん

雨中歸雁

かきくらし雨はふりきぬ天つかりけふたにとまれつはさやすめて

水邊春雨

蛙なくこゑもしめりて大井川井せきの波に春雨そふる

大森の梅見に行て

咲つゝく梅の下みち分のほり岡のうへより海を見るかな

同折。寄木神社の前にて。

沖つ浪よりきの神の御前より見えこそわたれ大森の海

蒲田の梅林を

都より南にくれは大森も蒲田もうめはさかりなりけり
蒲田なる梅の林を來てみれは只白雲の罩るなりけり

野遊

つみためてすみれは袖にみちぬれと猶日は高し野へもはるけし
をとめ子は赤裳引つれ若草の綠をふみてあそふけふ哉

高崎正風君の長女瀧子の身まかりしをいたみて　三月十七日

手のうちのあたら白玉あはれ〳〵露ときえけりあたら白玉
たならをもれてくたけし白玉はのこる光やかたみなるらん
さま〴〵にあはれおほかる世なれとも子を先たせし親の心よ

送葬の日

青山の此おくつきに君をおきて立かへるへき心地こそせね
あはれともいはゝおろかになりぬへしいはぬそふかき心なりける
をとめ子の花のすかたを青山の塵になさんとおもひかけきや

基督教會のほうとう式といふことに。梅の樹を奉納せんとするに。そへて出すへき歌よみてよと。片山淳子の乞へるに。

咲そむる若木のうめにむすふ實のちよのさかえは神のまに〳〵

寄歌祝　佐々木弘綱が六十一の賀に

言のはの道に花さく時にあひてうたふもたのし君かちとせを

夜花

梓弓はるのやよひの永き日によるをつきても花をみるかな
あまりにも花の日數ををしむとていく夜木かけに起あかすらん
あやなくも妹やとかめん櫻花よる〳〵いてゝひとり見つれは

水邊山吹

賤かくむ板井の水に打なひき山ふきさけり小山田の里

水邊花

すみた川水には小舟陸に馬こゝろにのりて花を見るかな

吾妻橋を

まかねもてつくりいたせるあつま橋うこきなき世は水の上にと

山ふきの下に蛙なくといふことを

山ふきの花の下水ぬしやたれとへはこたへて蛙なくなり

花林月

さくら咲遠山はやしほの〳〵と月こそにほへ霞かくれに

松間花

をしほ山松のむらたちしけゝれはこかくれてのみさく櫻かな

土筆

うなゐ子か手に取みれはつく〳〵しさなから筆の心地こそすれ

初花

さく時は一夜のほとにさく花をさも待遠にまたせつるかな

夜春雨　四月八日花雨吟社會當座

すかのねの永き日くらしふりくらしよるさへやまぬ雨の音かな

煙草

今は世につみはやされて煙くさかをりいたらぬ里なかりけり

夕花

くれぬとて歸る車を夕はえの花にひかれてとゝめけるかな

豐島夏海か松島見にいて立んよしかねていひけるを思ひて

のとかにも霞む空かな松島の旅には今やおもひたつらん

くさ〳〵

またれつる心なかさにくらふれはほとなかりける花さかりかな

川口氏の遠つ祖を祭る日に。備へむ歌こひけれは。

世ゝの祖のみたまのふゆをわすれしとまつるは家のさかえなりけり

みなに代りて

みかの葉の花よりみよりまことある心をのみや神へうくらむ

春曙

墨陀川堤の花はまらめともみつ猶くらきはるのあけほの

春の山ふみ

花見にとゆく人おほしあすか山きのふにけふや咲まさるらむ

森長命かもよほしにて星か岡に歌よみける時。雨ふりけれは。雨中新樹。

雨見えてわか葉の奥に打けふる松のみとりも夏めきにけり

待郭公

ほとゝきす此夕くれの雨にたになかすはいまはおもひたえまし

風わたるそのふの竹のふして思ひおきてまたるゝほとゝきす哉

郭公驚夢

時鳥跡はかもなきひとこゑに夢はのこりて明ぬこの夜は

雲間郭公

夕月の見えていりにし山のはのくもまをいてゝなくほとゝきす

泉

立よれは一木の松の下清水去年もすゝみし處なりけり

後朝

朝床に殘るまくらの移り香のうすくは人をおもふものかは

夏池

去年植し蓮もことしは花さきていけのこゝろもすゝしかるらん

夕早苗

住よしの松に夕日のおつるまてとりもたゆまぬみたのわか苗

夕つく日さすかにいまたあつけれは笠もぬきあへすとる早苗かな

雜麥露

夕露はなへてたけともとこなつの花にのみこそ玉と見えけれ

鵜川

長良川宵のうかひやはてぬらん舟はたに鵜のつにさほす見ゆ

今は世の光となりてなから川てらすうねのかゝり火の影

夏月

夏山のこのまもりくる月みれはこゝろ盡しは秋はかりかは

岐阜にありけるをりの口すさひ。くさ〴〵。

あら磯のきしの岩うつ波と見よ砕けておそは花もさきけれ

朝毎になれしかゝみにむかへともきのふのかけはうつらさりけり

今はとて世にかへるへき老か身のいてゝ都にすむかやさしさ

〔明治二十三年稿〕

梅の下に女たてり　大口鯛二家食

わかせ子か衣はる風ふくなへにうらなつかしき梅かゝそする

夕春雨　後藤冬見舎

明石潟せとの夕こち吹なきて磯のとまやに春雨そふる

憲法發布

いにしへもためし稀なる大みよの光はいまや四方にしくらむ

其翌日

あたらしきみのりと共に天の下四方にふりしくけさの白雪

窓燈

おこたりのまなひの窓にともなひてひかりもねふる夜半の燈

狐なくあら野の末のひとつ家にみゆるもさひしまとのともしひ

梅久薫

さきしよりはるの日數の大かたはうめの木かけに立てけるかな

小崎しけ子かよめいりしけるをいはひてをくりける

相生のかけをならへてことしより志けりさかえんこの山の松

隅田川木母寺。絶たるを再興ありしによりて。歌こひけれは。

朽にけるうめもわか木におひかはり花さく春に逢にけるかな

桑原盛居か身まかりしときゝて

ちとせもと思ひしものを老の坂道ふみたかへいつちいにけむ

月前花

咲花のうへにほひてる月はおほろなるこそひかりなりけれ

さやかにもにほふをみれはさく花のくもは月にもさはらさりけり

山家卯花

其そこに卯花垣は見えながら道なほとほしみ山へのさと

山里はぬのこもいまたぬかなくに卯花垣は白かさねせり

三月廿六日の夜。上野の花見にものして。

さくら花ゑみほころひてみゆるかなおもふとなき君かよなれは

をなし夜。電氣燈のあかりひるのことくかゝやきわたるを見て。

あかねさすひるかとはかりてらす火もおもへは御代の光なりけり

雨のふる日。上野にて。

ぬれ〳〵も見にこそ來つれ櫻花けふをかきりのさかりと思へは

上野山花の雫に花見るとわか立ぬれし花のえもつくに

花もし心あらは『君かぬれけむ花のえもつくに』なともいひてむやと思ふもをかし。

おとつ日もきのふもけふも來つれともあかぬは花の木陰なりけり

東照宮の社前にて

天の下掩ひしほとの袖もあらは雨には花をまかせさらなむ

淺草にて

雨ふれは花も見に來す淺草のあさきはひとの心なりけり

さくら花ちりしきにけりみ佛も雪のみ山やおもひいつらむ

山家落花

世をさけてかくれしやまのかひもなく風にさられてちる櫻かな

松にのみ吹とおもひしわか山のあらしの風にちる櫻かな

おこなひのこゝろかすかなる谷かけの庵さひしくちるさくらかな

四月の七日。相州浦賀にゆく。濱町にて。西野前知を尋ぬるに。此山のうへなりとをしへのまゝに。のぼりゆけば。山の麓に庵みゆ。それならむと。たよりつきて。入りてあないすれば。老嫗出てものいふ。あるしはと問へば。在りとこたへて。内にいりしかど。やかて前知出迎へて請し入れぬ。其座敷は池にのぞみ。山をうしろにし。田を前にし。はるかに海を見はらして。風景絶佳なり。六年前にみよしのにともに花みし昔かたりなとして。思ひ出ること多かり。前知歌よみて出せり。

さらぬたにおもひ出る頃をみよし野の花みし友にけふとはれぬる

諸ともに吉野はつせの山櫻みし春よりもけふそうれしき

その返し

いつとてもおもひ出すはあらねともけふそ昔はこひしかりける

みよし野の花のもとにてちきらすはけふ此浦に君をみましや

又前知　別れゆく君かかさしの山吹のみゆる限りはかへりみしかな

その返し

わかれちにのこす心は山ふきのいはぬ色にも見えけんものを

江の島より富士を見て

海こしに遠くのそめは浪のほに立てりとみゆる富士の柴山

大津より宇道はかり西に。公卿村といふ所あり。横須賀と大津との中間にて。其公卿のむかひに多度といふ所あり。茶店などあり。風景よし。

ねかはくは此うみへにてかつをつりたひつりながら我世へなまし

あはれなり沖つ波間にうきしつみこれも世わたるあまの釣舟

浦賀のいせ山にのぼりて。海をみさけつゝ。濱へにおりゆくとて。

おもしろき海は行手に見えなから目はなたれぬ山のそは道

君みれはまつこそおもひ出にけれともに花見しみよしの春

前知家つとにひろふもうれし三浦かた玉藻にましる波の花貝

この頃なるそ。瀧子の君の一めくりなるを思ひいてゝ。

咲ぬれと花もてはやす君まさてことしの春はさひしかりけり

浦賀の大津にものしける時によめる

浦つたひゆかんは近き道なれと雨にはとほき心地こそすれ

とふ人もなき業もなき雨の日はたゝ都のみ戀しかりけり

人よりもとく起いてゝ志つかなる海を朝日に見るかたのしさ

海邊春雨

ぬれつゝもゆくはたか子そ清見かたあめうちかすむ浦のまつはら

夜郭公

あやにくに宵まとひして郭公あたら初音を夢になしつる

田中惟寅か身まかりたるよしたよりきゝて

雲路まて鳴てたつねよほとゝきすうせにし君かたまの行へを

首夏風

むらさめの露ちる庭に山さとの花もこほれて朝かせそふく

わか竹の露ふく風のこゝちよくみゆるそなつのはしめなりける

螢

音はかりきくもすゝしきやり水のすゑさへ見えてとふほたるかな

夕川のかなたこなたと飛かひて水のくもてにゆく螢かな

をすのまをとほる螢のすきかけは月のもるよりすゝしかりけり

うすものゝあふきのつまそしめりける螢おふまに夜や更ぬらむ

あしろ木にともす螢のひをみれは夏さへさむきこゝちこそすれ

川螢

夕川のまこもがくれをゆく水もかつ〳〵見えてとふほたるかな

水の面にむれてほたるのとひかふや吹く川かせの絶間なるらん

夏朝

寐くたれの髪ときなから朝顔の花のゑまひをみるかすゝしさ

奇書祝　武井労矩賀

寒秋もなきうつしゑの松こそは君か千年のすかたなりけれ

佐藤誠か身まかりしよし。其子捨三よりしらせおこせけれは。

大空に猶ありとのみ見し月の雲かくれぬときくはまことか

曙庵主の還暦の賀に。春の心をよめとありければ。

かきりなくかすみわたれる曙にちよをこめたるたつかねそする

池の蓮の花見につとひける日。人ゝ歌よみけるに。

めつらしき人も見に來て蓮葉のうらなく物をかたるけふかな

八月八日。秋立ける日。又も蓮見にまかりて。

むら雨の露もこほれて蓮葉のうらふきかへす秋のはつ風

いさ子とも早こきいたせ愛知潟はせつり日よりけふもなきなり

わたの原末はくもゐとひとつにて物こそ見えね秋の夕なき

世の中をこきはなれたるわたつみの浪のうへにも秋かせそふく

菊盛久

絡よけのや根ふきてけりさらぬたにきくの盛りは久きものを

月前動物

さやかなる今宵は君かのる駒もくろにはあらし月毛なるらむ

庭落葉　加藤安彦家會兼題

庭のおもはこのはの時雨ふるまゝに苔の綠ももみちしにけり

にはの面にさくらの紅葉ちるみれはもろきは花に限らさりけり

一もとの梢なれともちるときは庭にあまりてをく木のはかな

霧間紅葉

きれ〳〵にもみちのにしき見えつるは谷間の霧のたてはなりけり

山紅葉

かのみゆるとほ山もみち朝霧のたゝまくをしきにしきなりけり

去年は高富なる桑原高泉の兩氏か身まかりけるに。ことし又河野かうせにしよし文のたよりにきゝて。

桑はかれいつみはつきてことし又野河の水もおとたえにけり

吉田利和より文おこせけるかへしかきて。そのはしに。

せまけれと高とのもありわかすまひ初雪ふらはとひきませきみ

川雪　十二月十二日鈴木高美家會

うつもれぬ小川の水の一すちを雪にさらせる布かとそ見る

わたし守いさことゝはんすみた川雪のいつこそゝらひけの宮

くれなゐに秋はそめつる瀧の川白くも雪のつもる冬かな

野も山も埋れにけり里川の水一すちを雪のくまにて

朝ぼらけ雪おもしろしすみた川船をやからむ橋よりやみむ

あひむかふ岸より岸に谷川の水をせはめてつもるゆきかな

十二月七日の夕かた。吉田利和かゆくりなく訪ひ來て。物語なとして夜更るまてあり

て。歸りけるあした。いひつかはしける。

初雪のふらはといひしわかこゝろおそかりけりな君にとはれて

十二月十一日。利和か山里のかりすまひをとひけるに。何くれ物語なとして。うまの時

にも成にしかは。ひるけもて出て。酒なとすゝむ。さて探題香といへるたき物とり出て
火にあふりけるに。山家松といふ文字そあらはれける。折から所にあへる題なるも。い
と興あり。さらは此題にて歌よまむとて。

山里のよしある松のかけとへは　のかれてはやくきみそ志めたる

祉頭祈世

すへらきの千代を八千代といのるこそ吾身にすきし願ひなりけれ

冬　松　十二月廿三日浅くさなる鈴木高美の家會に當座

霜雪にいろもかはらてひとりたつまつは冬こそみるへかりけれ

このころは松のあらしに耳馴れて吹かぬもさひし冬かれの庭

歲暮旅行

日かす行旅にはあれととしの關こえんとまてはおもはさりけり

冬　獸

あらかねの土の下まてさゆるよに穴さむしとや狐なくらむ

こたひ長良小瀬のうかひともを宮内省主獵局より鵜匠にめされけるをよろこひて

大みけに奉らむとうかひ人いのりしこゝろ神やうけゝむ

世中をあなうと思ひ沈みしはこのうかふせをみらぬなりけり

なから川たえしうかひも大みけにつかふるみよにあひにけるかな

かしはらの宮のみよより仕へこしうかひは今そ世にみられける

安藤幸輔か父の七十賀に

千とせふる松にかゝりてうら安くになふも久し藤浪の花

一月九日の夕つかたより雪ふりいつ。いなは山の麓なる含政寺の旅やとりに。ひとりつ
くつく打なかめて。

こからしの吹つまりしゆふへより空かきくらし雪になりぬる

いなは山みね白たへにゆきふりぬみやこもいまや夜寒なるらむ

さくらすみ桐の火をけにさしそへて雪の花見るゆふくれの窓

其夜もつかにて物さひしきことかきりなし

いなは山ふもとのさとの雪の夜にひとりしぬれはこゝろほそしも

貞徳院殿六十一の賀。寄松祝。　四月三日

陰ひろき此みそのふの松かえのちよをあふかぬ人やなからむ

一月廿四日。名古屋より東京へかへるとき。ふし川にて。

雪ふろき嶺をくるまの窓に見てふしの川とをわたるけふ哉

水邊梅

限りありてちらは流れむ川水にまつかけ見えてうめ咲にけり

百人一首の歌の上の句をかしらにおきて歌よめと冬見のいひけるによめる

百敷やあらためつくる宮はしらふとしきたてし御代はうこかし

わすらるゝ物ならませば忘れてもあるへきものをあなう世の中

大磯にて

おほいそのいそもとゆする波の音をきしる車のたえ間にそきく

人もをしわれもをしとはおもへともくれゆく春はせんかたそなき

春のはしめのうた

天の原豊さか昇る日のみかけ御影仰かぬ國やなからむ

賑はへる民のかまとのけふりよりよもにかすみて春は來にけり

みな人のこゝろゆるひに冬よりも寒きやはるのならひなるらむ

立といふはるはかたちもあらなくに見る物毎にあらたまるらむ

ときははしかすみわたりて御つゐちの松に吹たつはるのはつかぜ

つくは山をのへ吹こすはるかぜに雪の田ねもこほりとくらし

浦霞 松波資之か家の會に

二見かた波間の岸のうら傳ひ貝ひろふ子か袖のかすめる

海邊霞 鄉三位か家の會

よる浪のおとはきこえて螢か屋の垣ねも見えすかすむよはかな

難波かたいさりのあまかひくあみにけさはかゝれる春霞かな

和田の原こき行船のほの〳〵と八十あまかけて立かすみかな

後藤冬見か二月の中ころ身まかりけるに

たれこめてあるたに寒きはるの日に何地むきてか君はいぬらむ

初春の歌

春もけさめくり來ぬらむまかね路のくるまのけふりかすみ初たり

三條實美公薨去なりしとき。歸雁入雲といふことを。水原史郎かよませけるに。

天雲に消て跡なくゆくかりもまた來む秋のたのみやはなき

百歳翁のかきたる五字一行を。德川諧子の君の六十一の御賀に奉るとて。

もゝとせのおきなかふての命毛のなかきためしを君にとてこそ

雨中霧 蒲生貞か家の會に當座

はる雨にふりこめられて窓の内に一日きゝつるうくひすのこゑ

春雨をきゝつゝ朝いしてをれは日とくたけぬと霞のなく

都歸雁　花雨吟社の合組題

をりこそあれ花のみやこにさくらさく春しも雁のたちかへるらむ

やよやまてわれもかへらむあまつかりみやこの春もこゝろなるちねは

たち花を

立花はかけふむまてに成にけりむかしは市のうゑ木なりしを

桃花　花雨吟社

をとめ子かそのゝあそひに桃の花をりてちらしつあたらその花

水上はもゝよりほかのはなもなしこや仙人のすみかなるらむ

けふり

谷こしの山ふところに庵一つはるかに見えてたつけふりかな

花さかりに故郷をおもひやりて　加藤安彦の家の會に

古さとをおもふは旅の常なるをいとゝゆかしき花のころかな

三月十二日。浦賀なる大津にやとりて。此あたりを打みるに。

波間よりはるかに見ゆる横須賀の湊いてにし舟やゆくらむ

十三日。ていきいとよし。磯つたひに貝石などひろひありきしか。其夜思ひかけす雨ふりいてたり。

風はなき波は音せすなりし夜の雨そふる

浦に行けるに。此あたりのあまの子ならん。濱邊におりて行を。何するそととへは。あさりといふ貝をもとめたるなりといふに。

あまの子はかたま片手に取もちて磯にあさるはあさりなりけり

水邊桃　阪正臣か家の會に

桃そのゝむかしのちきり思ひ出てむすふもゆかし花のまた水

板井くむつるへの竹やふれつらんちりて浮へるもゝの一はな

空のみか下行みつのいろまてもふへるに似たり桃の花園

さかつきも今やうかへむやり水に移りてもゝの花咲にけり

朝柳　經氏當座

朝つゆのこほるゝみれは青柳の目にこそ見えね風はふくらむ

朝またき牛引てゆくあけまきか袖に露ちる青柳のかけ

我はまたねふたきものを青やきの目はとくさめて眉つくりけり

江春月

大ゐ川入江の松にかゝりけり花にかすめるはるのよの月

隔水看花

初瀬川早瀬をわたす船もあらはむかひの峰の花も見て來む

大井川へたゝる水はくらけれと米末はあけて花そ見えゆく

木下は行かひ志けし墨田川花はこなたの岸よりそ見む

名所花　鈴木重嶺會

玉しきの都のものとなりぬなり東の比えの山さくら花

世をさけて入にし人やよしの山かすみかくれの花は見るらん

風

なひきふす青人草のうへにこそ志つかなる世の風は見えけれ

世中のかせのすかたの志つけさを民のくさ葉のうへに見るかな

花下逢友　花雨吟社課題

めつらしや思ひもかけす木の下にこそも花見し友にあひぬる

花欲散　三月十三日鶴久子會當座其日雨ふり出ぬ

かきりありてちりなんとする花の上に雨さへけふはふりいてにけり

咲しよりのとけき日のみおほかりし今年の花もうつろひにけり

朝柳

はるのよは志つかに明て朝露もいまたこほれす青柳の絲

運日

中々になすわさならす成にけりあまりになかき春の日なれは

三月十九日の事とや。松の門三草子の家にぬす人入りて。あらゆるものとも。一つも

さすぬすみいにけるに。三さ子はかくよめりとそ。『白浪にたちさわかれて松の門はちり

たにもなく成にけるかな』。いと心くるしくいとほしくもおほえてとふらひにやるとて。

住よしの岸にもあらぬ松のとになに白浪の立さわきけむ

春情　故荻岳大人十五年祭

さくら花君かむかしを忍はせてにほふやはるの情なるらむ

柳風靜　四月三日徳川邸に臨時開會の時當座

青柳のきのふの絲をくりかへしけさもみたして春風そふく

春のよはさつかに明て青柳のかみくしけつる朝かせもなし

風たゝし夕に見れはあをやきの目さへねふれるこゝちこそすれ

春の日のおかきにうみて柳さへうこくこゝろもなくなりにけむ

花盛

さかりなる玉のうてなの庭櫻君かひかりをあふきてそ見る

咲花もゑみほころひてこの宿のさかりを見するけふの長閑さ

鳥居すかねの母の九十賀

百とせにちかつくみれはその末のちよもたやすく思ほゆるかな

四月二十一日。藤井眞藤か問ひきて。ほとともなく歸りし後。はかきにていひやる。

たひ衣かさねて來ませまつをかのまつかに一日物かたりせむ

梨花

志なてるや片岡山の春さひてさけるもあはれつまなしの花

四月廿三日に。後藤冬見か追悼の會を星か岡にてしけるに。風といふことを。

奉る玉くしの葉にふくかせの目にこそ見えね君いますらむ

人の世もかくこそ有けれ風をのみ常なきものとなにおもひけむ

四月廿八日。郷氏橋場の別業にて。人こつとひける日。水邊遲櫻といへることをあるし

のよめといひけれは。

墨田川のとけき水にかけとめて殘る櫻そ久しかりける

手鞠のうた

ますらをか蹴るおときゝてをとめ子も庭に手まりや思ひつくらむ

隨意莊の夕景

すみた川さくらのわか葉かけ見えて水のみとりも夏めきにけり

不老門の前に花といふことを思ひて

めくる日のかけさへ遲き宿なれはいつまて花もさきにほふらむ

いつの時なりけん都花を

さくらさくはるの盛をきて見れは都は花のところなりけり

禁中花

宮人のこゝろをはなになすものは雲井に匂ふさくらなりけり

新竹風　花雨吟社會題

わか竹のなひくすかたもすゝしきを露さへちりて朝風のふく

寄書述懷

わかよはひ百年もかなさらは世にありとあるふみよみ盡すへし

尋見餘花　郷氏の月並會

やまふかくこしかひありて風にさへちられぬ花を見はてつるかな

久待時鳥

まち〳〵て五月のやみも過にけり月にやなかん山ほとゝきす

時鳥たゝ一こゑのはつ音をはいく日またせてなかむとすらむ

水鶏

山澤の水のほとりのかけつくり枕の下にくひななくなり

浦郭公　五月十七日家の會に

一こゑは浪にまきれてみほの浦の松はらとほくなくほとゝきす

あさぼらけ田子の浦波さやかにもうちいでゝなくほとゝきす哉

此浦に心をよせて白浪のたちかへりなくほとゝきすかな

玉くしけ二見のうらの明かたに一こゑなきてゆくほとゝきす

船出するなにはの浦にともつなをとくかへれとやなくほとゝきす

がつをつる時來にけらし浦近く山ほとゝきす初音なくなり

小まん女か新宅のいはひに。杯によする祝といふことを。

よろこひのかすもかさなるさかつきにさかゆくやとをくみてこそしれ

梅雨

さつのめかきならし衣ときあらふひまこそなけれ五月雨の空

梅のみもわか身もいまはうみはてつあまり久しきさみたれのそら

夕月のくもりし雫をはしめにて有明までも五月雨のふる

わか庭のきりしまつゝじいたつらにさきてちるまてさみたれそふる

一葉ちる秋よりさひし桐の花こぼるゝ庭のさみたれの雨

ゆふ月のかけもるはかりさみたれのはれまもあらはうれしからまし

海邊夏月　六月十三日家會

和田の原いるやまのはなけれともいつれはあくるなつのよの月

六月廿一日。大八洲學會にて故人の靈祭執行の時。雜題。夏月。

なつの夜ははかなく明て中空に見はてぬ月のかけをしそ思ふ

納涼　七月十九日千虎か家の會雜題

松かけに夕日はいまたのこれともすゝしくなりぬゆあみしつれは

庭草に水うちそゝき端ゐしてかせまちをれは月もいてにけり

神かきの御手洗川の夕すゝみまつこゝろよりすゝしかりけり

扇

すゝしさにおきて來にける扇こそ夏をわすれしまるしなりけれ

琴

なつかしきをすの内なる琴の音にねたくもかよふ岑のまつかせ

今も世にあつまあそひの殘らすはむかしのことをなにゝ忍はむ

かきならすいとにこゝろの引るゝはいかなることのゐらへなるらむ

さかの野の月にゐらへし琴の音はいまもさやかに世にきこえけり

みかくらに弓を並へてゐらへけん昔のことのゐのはるかな

神代よりゐらへたえせぬことの音に心ひかれぬ人やなからむ

地震

わさはひは空よりとこそ思ひしかつちよりもわくけふの大なゐ

夏聲

あつき日はいとゝきほひてきこゆなり氷うりゆく賤かよひこゑ

雨すきて夕すゝしくふくかせを軒はのすゝのこゑにこそきれ

小山田の里の中道あさゆけはこなたかなたに水鶏なくなり

樹陰蟬

せみの鳴松の陰こそすゝしけれ聲のきくれに袖はぬれねと

上野山きける青葉の陰ゆけは楢とよみて蟬のなくなる

日盛のあつさをさけて松かけによれはすゝしきせみの音そする

清水わく松の陰こそすゝしけれ楢にせみのこゑもきくれて

萩 八月廿一日植松が家會

此秋はまたはたおりもこゑせぬにいかてかはきのにしきなるらむ

さをしかのこゑ身にゐみし夕よりみたれそめたる萩か花つま

わか庭の蜘のいはらひ人またむけふこそはきは盛なりけれ

いなつまのほのめくたひに一目つゝこまかに見ゆる秋萩の花

池水にうつれるおのか影の上にちりてがさなる秋はきの花

垣もなくあれたる庭の秋萩は野へとひとつに花咲にけり

野へ見れは盛になりぬはきの花つまとさためてゐかの鳴らむ

垣ねゆくいさゝ小川にうちなひき秋萩咲り枝もとをゝに

あれはてしまかきも秋はゆひかへん萩の花みに人もこそくれ

むらさきに咲るもあれと花つまのはきはゐろきそゆかしかりける

蟲 同く

秋の夜の深き哀を音に立てわれをなかするきり〳〵す哉

秋の野の千くさに物や思ふらんさま〴〵になくむしのこゑかな

さやかなるむしのこゑかな白露の玉のひゝきもきく心地して

ふり過る一むら雨のあとに又ふり出てなくすゝむしのこゑ

待戀

山のはに月おちからすなくまても人はおとせすたゝあきのかせ

渡邊俊明よりふみのはしに西京にあそひたる時の歌とて。

『水清きかもの河原の夕月夜人はつとへとすゝしかりけり』

『かも川の河原もあれとすゝしきは糺のもりの木かけなりけり』とありけれは忍はすの池邊もあれとすゝしきはうへのゝもりの木蔭なりけり

すみた川つらなる岸の高とのゝともし火見えて涼しかりけり

田家早秋

わか門のわさ田もいまた秀なくにほにあらはれて秋風そふく

わか門のわさ田の稻葉吹わたり涼しくもあるかあきのはつかせ

脇坂文助より何かしの斷腕の歌こへるに

高松保郎ぬしは。人となりたけくをゝしき志あり。かつて其義父なにかしか主君の怒にふれて。腹きらんするさかひに。おちいりけるを。その爲にみつからわか左のうてをきりて。そを箱にいれて。主君に奉りわひたりけれは。義父はとみに罪ゆるされて。命をまたくすることを得たりとなん。いま其ことをおとろきよめる。

たへぬへき人の玉の緒つなきしは斷しかひなのかひにこそあれ

をゝしくもわか腕たちてたえぬへき人のたまのをつなきとめける

見月　九月十六日加藤安彦家の會

あしかちるなにはの沖にこきいてゝいこまたかねの月を見るかな

ひるとのみ見えまかひたる月かけのきはしくもるに夜とこそきれ

聞雁

空の海にからろのおとそきこゆなるはつかりかねやわたりきぬらむ

鳴つれて行かりかねをたゝひとりわれはたひねの枕にそきく

殘月

人の世もかくさそ有けれ秋のよの月はうすれて夜は明にけり

なかきよのあけなんとする空に猶しらみかねたる月もありけり

月前船

夜もすから月にうかれてこく船はあくる空こそとまりなりけれ

夜聞鹿聲　十月五日郷三位家會

ひかし山あかつきあらし西ふけは都にちかくきかの音そする

さやかなる門田の月にわかたちてきくともきらす鹿のなくなる

山家月

とひわたるわしの羽風に雲きえて月かけすさし木曾の山里

月前旅行

暮ぬれは駒はやすめて〻る月の
久かたの空行月をあまさかる
日はくれて道またとほき野の末に出たる月のかけそ身にしむ
さしのぼる月そうれしき日はくれて道またとほき秋のたひちに
旅人のよる行道はて〻る月のかけなるこまやあるへなるらむ
宿からむと思ふ心もさやかなる月にわすれてゆくたひちかな
さやけさにとゆきかくゆきやみならて月にもまよふわかたひ路かな
ともにゆく人しなけれはよる〳〵の月こそたひはあたしかりけれ

菊　黒田清綱第合

谷川の香をかくはしみとめくれは山ちの菊のさかりなりけり
言の葉の句へる宿の菊なれはかくはしからぬ花なかりけり

行路霧

いかにせん行先たとるみ山ちに霧さへ立て日はくれにけり

紅葉浅　當座

そめはてはもろくもあらむ初もみちまたしき枝を折りてかさゝむ

酒

酒といへは品こそありけれにこり酒こ酒すみ酒品こそありけれ

黒田氏の會に。服部磯子に出あひて。去年岐阜にてともに蓮池のはす見つるとをおもひいてゝ。かくよみて見せつ。

ともに見しうてなのはちす時のまにやけてほのほの池となりにき

磯子かへしもろともに見むとおもひし蓮葉のやけぬときくぞかなしかりける

十月廿一日。朝まだき出たちて。新橋より汽車にのり東に向ひてゆくは。名古屋にものせんとてなり。けふは晴たれと。折〳〵雲たちさわきて。沼津のあたりよりも。不二のね見えす。三保の松原なとうち見渡しつゝ。猶ゆき〳〵て。かへりみれとも。つひに不二の見へさりしは。いと惜かり。

白雲のねたみにあひて富士のねの雪の姿は見すなりにけり

伊勢地より大和に入りて。笠置山下を過く。懐古の情にたへかたし。十月廿四日

いてまししの昔おもへは笠置山いきとほろしくおもほゆるかも

猿澤の池のほとりにて

かれてたつ汀のやなきかつちりて秋風淋し猿澤の池

春日神社境内の。ひろさ限りなし。松杉の老木多くたてり。そこかしこに鹿のむれ一
そふあり。その數をとへは。凡三百五十はかりもやと答ふ。さて神前にふしをかみて。
春日山　かみのみいつは　昔より　きかありけりと　きくそ尊き
手向山にて
たむけ山　紅葉はいまた　染ねとも　心のにしき　袖にさゝけむ
三笠山
天の原　ふりさけ見けむ　いにしへを　あふきて忍ふ　三笠山かな
若草山
もえいてし　昨日は夢か　秋にあひて　淺茅色つく　若草の山
高雄山にいたりつきて
さはかりは　高からねとも　たか雄山　たかきは山の　名にこそありけれ
峯も尾もみなかへてなり　高雄山　そめはいかなる　錦ならまし
道のかたへの小高き所に。楓の大樹一もと立るを。見かへりもみちといふ。色のうるは
しき此山中にならひなしとそ。
また　染あへぬ　木蔭なれとも
見かへりの　名をなつかしみ　立よりつ　また　染あへぬ　木蔭なれとも
よく染たる一枝を折りて。其二葉三葉を紙におしくるみて。書にそへて。東京なる黒田

清綱翁におくるとて。
初もみち　つゝみておくる　一葉にも　深き心の　いろは見ゆらむ
たかを山君としみなは　いかはかり　紅葉の色も　はえかあらまし
麓をなかれめくれる清流は。名に高き清瀧川なり。
おちたきつ　清瀧川の　きよき瀬に　うつるも清し　谷の紅葉
楓尾より梅の尾にめくり來てみれと。紅葉猶いまたし。
梅の尾の山おく深くわけ入れともみちの色は淺くもあるかな
時そめし此梅尾の種よりや　宇治の木の芽は　蒸そめけん
鎌田正夫にあふ。近き頃この地に移り住しよしなり。
遠く來てあひみつるかな　三年餘り　都にてたに　へたてしものを
暮秋月
かきくもる　秋の末の　月見れは　心もくるゝ　こゝちこそすれ
よもすから　秋の名殘を　おはしとて　有明までの　月を見るかな
有明の　月のひかりの　はつかにも　秋の日數は　なりにけるかな
深夜擣衣　花頭吟社
まとろまぬ　しつかすさひも　からころも　よその夢まて　打さますらむ

たちぬはむあすのためとやから衣此夜ふかしてしつかうつらむ

なくちこをいまはねさせて賤の女かふけたる月に衣うつらむ

山　蒲氏従七位に叙せらる

うへもなき國の姿を天そゝり空にみせたるふしの芝山

天の下ならふ山なきふしのねのたかきや君かみいつなるらむ

うこきなき國の姿を天くものうへに見せたる富士の柴山

御恵みをあふけはたかし位山のほりそめしはふもとなれとも

秋日登高　花雨吟社當座

秋山のもみちふみわけのほり來て鹿の音をさへきゝしけふかな

たけをあさりもみちかさしてのほりこし山のかひあるけふにもあるかな

白菊禁體

かくはしき香を吹あけのはまなれは花か波かはかせにこそゑれ

殘　月

よををしむ心やそらにかよふらん明てものこる月のかけ哉

人のよもかくこそ有けき秋の夜の月はうすれて夜は明にけり

薄暮雁

うす墨の夕のそらにかきけちて見えこそわかねかりの玉つさ

村鳥はねくらもとむるたそかれに天とふ雁の行へしらすも

初紅葉　十一月十一日蒲氏當座

薄もみち先珍らしきはつしほにけさは心をそめてけるかな

時雨ふるをしほの山やいかならんもみち初たり大はらの里

海邊霧　同く

わかの浦のなきさも見えぬ朝きりにたつなくかたや蘆へなるらむ

明石潟朝きりかくれゆく船のほの〳〵見えて秋かせそふく

朝落葉

やせてたつ門の柳の枯葉まてさそへはさそふ朝あらしかな

秋霜

山ふかき木曾のみさかの秋の霜身をきるはかりさむくなりぬる

寒かりし此曉の秋かせに露もこほりて霜となりぬる

菊

植さりしわかおこたりの悔しさはとなりの菊のさかりなりけり

うへもなき匂ひなりけり大君のちよのためしのきらきくの花

薬といふ題を

うまさけを薬とまらて良き薬口ににかしといふはたかまと

寄瓢祝　和田頼市か七十の賀に

久しかれひさこよひさこ君かため千世のほき酒もらんとおもへは

對月偲昔　十月十四日平田神社に献

くまもなき月にむかへは思ひいつるむかしまてこそさやけかりけれ

菊　十二月十四日矢田家雛題

老の手に造りさかせて見る菊を翁くさとや人のいふらん

かれわたる草のま垣にたゝひとつ秋を志めたるまらきくの花

みたれさく花にまかせてつくらぬはつくるにまさる庭の白菊

わきも子と袖引つれて梓弓谷中のきくをけふ見つるかな

秋ふかみ千くさはかれし後までもにほふや菊のみさをなるらむ

雨中紅葉　同當座

紅にしたゝる露の色みれはもみちは雨をそむるなりけり

そめ〳〵てもろけにみゆるもみちはをちらさぬはかりあめはふらなむ

こからし

ちりのこる枯葉さわきてかしは木にかしましきまてこからしのふく

只一木かれて立たるかしは木にけふも吹なりこからしのかせ

ちりまかふ紅葉を空に吹あけて雨とふらするこからしのかせ

久かたの月の桂もちるはかりふくおとたかしこからしのかせ

あしろ木へちるもみちはにうつもれてたなかみ山にこからしのふく

時雨にも雪にもならてうきくものはれ行空にこからしのふく

蒲義質の母の身まかりける七日に墓にまうて、

おもかけに猶志のはれてはゝ木〻のありとも見えぬかけそこひしき

ありとのみ猶おもはれてはゝ木〻の見えす成にし影そこひしき

十一月初旬地震ありけるとき

家もなくなねふる里はやけにけりいつこにおかん露のこのみを

なねふりしその朝よりこのはちるおとにもそよとおとろかれつゝ

御めくみのつゆをはしらて露のみの置ところなく思ひけるかな

住なれぬまきのかりやにおきふして露と霜とにみはこゝえつゝ

なねふりてはかなくなりし諸人のみのをはりこそ悲しかりけれ

盲人下總國香取郡金日津村青野耕平といへる人の愛國心ふかきをめて、歌よめと郷氏

のいはるゝに

めに見えぬ神もあはれとおもふらん世のためつくす君がまことを
よき事をきゝて心に志めよ君うき世のさまは見えすともよし
うつせみの人目に見えぬ鬼神もあはれとや見む君かこゝろを

冬朝

起出てむかふ鏡に志らかみのうつるかけさへさむきあさかな

あたりまかせ〔明治二十五年稿〕

一月一日によめる

あなうてふ年をおくりてよきとを思ひたつとしけふはむかへつ

日出山

神路山さしいつる日の影みれは岩戸あけたるこゝちこそすれ

隣梅 鵜久子合

北窓に風こそかをれ近となり南おもてのうめやさくらむ

里梅 黒田氏

うめか香に引れてとほくきつるかな此里迄とおもはさりしを
そことなく風こそかをれ此里はなへてや梅のさかりなるらむ

春自東來 花雨吟社

朝日かけかすめるみれはひむかしのみやこそ春のはしめなりける
ひむかしの都のはるの光よりつくしのはてもかすみそむらむ

早春山 鈴木重嶺合

はるたつと聞しはかりに遠山のかすむやおいのひか目なるらむ

春山家 郷氏

わらひとるたよりに人のとふのみそわか山さとの思ひいてなる
梅といひさくらといひて山里の春もいとなくくらすころかな

朝鶯 伊藤新か家の合

なれもまた花のねくらをいてかねてなくか朝いのまとのうくひす

春水 郷氏當座

谷川の打いてし波も立かへりもとの氷にむすふ春かな

松上霞

雪消ぬ遠山まつも都よりみれはのとかにかすみたな引

朝日さす千代田の宮のまつの上に霞もたかくかゝりけるかな

松間梅　江刺恒久令

かくなから千とせにもかなときはなる松の木の間に匂ふ梅かえ

松にふく風もものとかにかをるなりこのまの梅の咲きそめしより

もろともに千世もとこそは匂ふらめ松のこのまの梅のはつはな

枝かはす松のあらしもやはらきて吹くるとに梅か香そする

松の葉のいつともわかすふく風にこのまのうめのにほふころかな

ときはなる松をもはるになすものは木の間の梅の匂ひなりけり

井伊家の三十三回忌に恢舊といふことを

國の爲きえて後こそさくら田の雪も花とは世に囃りけれ

酒

妻も子も並ひて祝ふとその香にけさより春とおられぬるかな

夜梅　伊藤氏當座

なつかしくかをらさりせは梅の花よるさへ陰にたつねこましや

窓のねくらやそことこゝろあてに見る袖かをるよはの梅か香

永き日もあそひくらしてふしみ山梅見る頃はやみになりぬる

暮ぬとて人は歸りしをすの戸のおほろ月夜に梅かをるなり

まつかにも月はのほりぬ百鳥の啼くらしたる梅のこすゑに

蒲田よりかへり車に香をとめてよるのうめ見る大もりの里

柳露　黒田家令

白露をぬけるやなきのいとすちは玉のすたれのこゝちこそすれ

青柳のみとりのいとをよりかけてぬくおら玉はけさの朝露

ぬきとめし柳の絲のうれしきは露を玉とも見するなりけり

春の風のとかにふきて青柳のつゆあたゝかに見ゆるけさかな

東京の橋　當座

かち人のおともこゝろにあつま橋わたるや花のさかりなるらむ

動きなく見えこそわたれめかねはし萬代かけてたかつくりけむ

竹裏鶯

葉こもりになくとはすれとうくひすの聲たか叢に隠れさりけり

山かつか庵のかこひのたかむらにうき世隔てゝうくひすのなく

寄駒戀

つれもなき人は春野の駒なれやなつきかたくもおもほゆるかな

千里ゆくこまのあかきのはやくより心にのりておもひきわれは

かにかくにあれのみまさる春こまのなつきかたきは人のこゝろか

望月の駒ならなくにあふ坂の關にひかるゝわかこゝろかな

河春月

久かたの中なるさとの川水にうつるもくもるはるのよの月

ゆく水のおとそさやけき大ね川月は臙にかすむ夜なれと

よしの川水上とほくさく花のにほひにかすむはるのよの月

春月

面かけをたれにおもひてはるのよの月人をとこおほろなるらむ

大ね川花のかけをも見るへきにあやなくかすむ春のよの月

黒上櫻雲

はる〳〵と立こそつゝけさく花の雲はこすゑに人は木かけに

たをやめのみとりの袖にかゝりけりすみた堤の花のおらくも

隅田川水のみとりもうつるまてさきつゝきたる花のおらくも

すみた川堤のさくらさきにけり水のみとりをおほふおらくも

白祠松露

白髭の松のけふりやうすくこきすみた川への霞なるらむ

筑波白雪

すみた川おくれてわたるくもまより雪こそ見ゆれをつくはの山

古渡鴎聲

角田川古きわたりの都鳥むかし戀しき音をやなくらむ

鐘淵明月

行水のおとさへすみてかねかふちおつめる月の影のさやけさ

今戸曉煙

ほの〳〵と今戸は明けて立のほるけふりのみこそ夜をのこしけれ

水神涼雨

涼しさを道にのこして夕たちの雨はすきゆくみくまりの森

夕立の雨に濡そふ水はのも神のこゝろもすゝしかるらむ

みつゑさすみつはの森のわかみとりおたゝるはかりゆふたちのふる

金山鯨吼

淺くさの市のにきはひことはてゝ更行かねのおとのおつけさ

柳圃蟲吟

春かせの絲よりかけし柳はた秋のはたおる蟲のこゑ〳〵

秋葉紅楓

夏陰のみとりもあれと紅の秋葉のもりはことさらにこそ

遙林帘影

はるかせにはたこそなひけさくらさく林のおくやさか家なるらむ

ひるかへる風のはた手にまねかれて花の林に人やよるらむ

綾瀬靜風

のとかなる浪のあや瀬の夕日かけ片帆にうけて船かへるみゆ

待　花　郷氏

さくら花さかり待間の久さを咲ての後の日かすともかな

山さくらいつまちつけてさかぬ間の心つくしを花にうらみん

とふ人はおもひたえたる山里もまたるゝものはさくらなりけり

咲いてむ日かすかそへて花暦けふもいくたひ巻かへすらむ

尋　花

待とほきこゝろいられに山櫻さかぬ花をも尋ね來にけり

山寺のつかひはおそし櫻花いさたつねこむ馬にくらおけ

さくら花たつねてのぼる山の葉にそれかあらぬかみゆる白くも

たつねわひ今はと歸る山陰の木の間に花を見いてつるかな

山さくらまたさく花もなきものをなにゝうかれて尋ね來つらむ

曉　花

面影にたちてにほへは山のはの雲こそ花のまるへなりけれ

行くれぬいさこのもとに一夜ねて明日も尋ねん山さくらはな

曉歸雁

有明のかたふく月のかけよりもをしきは雁のわかれなりけり

いかはかり歸るこしちのとほけれは曉ふかく雁のたつらむ

庭春草

春雨の露はそむとも見えねとも名もおられぬ草にはあれとおりたちてつまゝくほしき庭の若草

あたゝかに一夜そゝきしはる雨の跡みとりなる庭のわか草

震災後をおもひやりたる歌よめと有けるに

穴にすみ木に宿りけんいにしへのさまこそ見ゆれ大なゐのあと

家くらもよしなきものと大なゐのふりしあとにそ思ひおりぬる

すむ家も持てるたからも何かせんなゐにのかるゝ道しなければ

長崎屋の松風といへる菓子の歌よめと。夏海のいひけれは。

此やとに吹つたへたる松風のひゝきは高く世に聞えけり

かきりなき宿のまるしとまつ風の千よの聲こそ世にひゝきけれ

春月朧

このころはおほろ夜ならぬ夜半もなし月のかつらも花曇りして

惠皚大とこの『あつまより引かへしたる梓弓まつより早く君の來てけり』とよみて見せけれは

故郷の春なつかしみ梓弓引かへしたるわれとまらなむ

上有知の里に。むかしの友とちうちつとひ。夜一夜かたらひあかして。四月六日

思ふとちかたる間もなくふけわたるはるの夜をしき此まとゐかな

なつかしき故郷人のかたらひに都のはるもわすられにけり

遲　日　四月二十日井上通泰能登香川景樹翁年祭歌會

おもひいつることの多きにすかのねのなかき春日も短かゝりけり

空さへや昔のはるをまのふらむけふの日影のくれむともせぬ

新樹風　おなしとき

櫻花きのふかちりし山陰の青葉うこきてあさかせそふく

きゝす

あし引の片山つはきほろ〳〵と花ちるくれにきゝす啼なり

はるのよの小くらの山もまらし〳〵と峯より明てきゝす啼なり

赤堀氏(柿の屋)の老翁によみておくる

まふき世のうさをはしらて八十とせになる實はうまき柿のやのをち

鈴木吉造か幼兒をうしなひてかなしみけるに。よみておくる。

君みれは先涙のみせきあけてなくさめつへきことのはもなし

來るたひにをちよをちよとよひし兒の其こゑ今もきくこゝちして

ちことよひをちとよはれてなつさひしをちはのこりてちこのうせぬる

わか爲にまらへしをりの琴の音は耳にのこりていまも忘れす

我みゝにのこる形見のその音は人こそきかねかなしかりけり

實にならん後をたのみしうめの花さかりをたにもまたてちりぬるを

あまりにもかくはしかりし梅の花とくちりぬへきまるしなりけむ

靜岡縣某村にて失火のをり火にいりて人をすくひける男に

きくにさへ涙こぼれつ火にいりて人をたすけしますらをこゝろ

鈴木嚴の身まかりしときゝて

大なゐふりしをり。せうそこきこえしに。そのわさはひはのかれ給ひて。つゝかな
くもはすよしの返りとをたまへりしかは。あなうれし。をりもあらは。とふらひて
あひ見まゐらせむと。こゝろにおもひたのみてゐたりしに。いかなるみやまひのお
こりてか。かくにはかにはかなくなり給ひけむ。このみまらせをうけ給はりて。く
やしくも、はかなくも、とほ〳〵になみたおさへかたくてなむ。

なゐふりしをりもつゝかのなかりしときゝてうれしくおもひしものを
かゝらむとかねてもまらはとくゆきてまめなるみかほ見つへかりしを

夏　蟲　五月十五日觀昌院にて夏海の月並に

身ひとつをなつはのみ蚊にせめられておき所なくおもひけるかな
くひな

有明の月のさす夜の柴の戸を明るまてとやくひな啼らむ

熊谷直清といへる秋田人の七十賀に　松蔭と號す

萬世の松のおひさきかそふれは七十ちはまた二葉なりけり

松の門みさ子の六十賀にも同題なりけれは

わかゝへるみとりもふかきまつのかとあけてや千世のはるをまつらむ

出京の時。井手今滋に別るとて。

行末も心へたつな立別れかへるの山のみねの白雲

螢　螢

やり水のかゝりは消て草むらにのこる光は螢なりけり

いふせしと思ひし庭のくさむらによるはすゝしくとふほたるかな

寄籠戀

吹かせにすき影見えて玉すたれうこき初たるわかこゝろかな

あふひ

神山のみあれや近くなりぬらむ葵の草もときめきにけり

年ことにかさして老となりぬれとまた二葉なりけふのあふひは

いくとせのけふのみあれにあひぬらむかさしの葵二葉なからに

水邊螢

里川のきしの細道くらけれと行先見えて螢とふなり

とふ螢うつろふ影はこかれても水はいよ〳〵すゝしかりけり

いかなれはもえて螢のとひわたる影水底にすゝしかるらむ

こゝにきえかしこにもえて里川の水のをちこち螢とふなり